

東京大学大学院医学系研究科家族看護学分野・

東京大学医学部家族看護学教室

年報 (第5号)

平成13年4月～平成15年3月

東京大学大学院医学系研究科家族看護学分野・

東京大学医学部家族看護学教室

年報 (第5号)

平成13年4月～平成15年3月

目次

はじめに	1
1. 教育活動	
1-1. 担当講義・実習	2
1-2. 卒業論文・修士論文・博士論文	4
2. 研究活動	
2-1. 研究費	5
2-2. 学術研究業績	7
2-3. 学内外の公的活動	22
2-4. 国際交流活動	24
2-5. 海外学術活動援助	25
3. 教室カンファレンス	26
4. 家族看護学教室研究会	41
5. 教室の沿革	43
6. 資料	46

はじめに

家族看護学教室年報の第5号が出来上がりました。皆様にお届けできることをうれしく思います。

家族看護学教室は平成4年10月にスタートし、平成5年4月から本格的な教室づくりと教育・研究活動を開始しました。すでに満10年が経過し、平成14年11月22日には、この10年間の教室学部・大学院教育のまとめの会を開催するまでに至りました。4号以降の教室員の移動では、平成13年7月に助手として、松井典子先生を迎えました。また、平成14年4月に助教授として、上別府圭子先生を迎えました。

この二年間の当教室の活動は、論文31編（うち英文原著7編）、学会発表42（うち、国際学会7）と前2年間より飛躍的に増えました。卒論生（山本真理子さん、杉浦仁美さん）、修論生（杉山智子さん、福田泰子さん、北野和代さん、深堀浩樹君、ベスッキさん）、博士論文生（河田みどりさん、山下仁君）がそれぞれ無事修了し、学位を得られたこと、研究費が12件（うち、文部科学省研究費6件）採択され、順調に研究活動が維持できたことは教室員の努力の成果です。

平成13～14年度の非常勤講師は、大学院：田中哲郎先生（国立保健医療科学院生涯保健部部长）、鳥居央子先生（北里大学看護学部教授）、法橋尚宏先生（神戸大学医学部保健学科小児・家族看護学教室助教授）学部：高橋真里先生（北里大学看護学部教授）、須貝佑一先生（高齢者痴呆介護研究・研修東京センター副センター長）、渡辺裕子先生（家族ケア研究所所長）にお願いし、この他多くの学内外の先生方のご協力を得て、無事に教育を修了することができました。御支援ありがとうございました。須貝佑一先生、田中哲郎先生、高橋真理先生には今年度一杯で当教室の非常勤講師の任期を終了していただくことになりました。長い間のご尽力に心からの謝意を表します。

本年報第5号（平成13～14年度）は松井助手のご尽力で出来上がりました。ありがとうございました。教室員のご協力に改めて深く感謝申し上げます。

最後になりましたが、私はこの3月末日をもって、東京大学を退官することにいたしました。かえりみますと、10年半前、教授室一部屋から始まった新設の家族看護学講座（当時）がこの3月には先輩の教室と同じスペースを保有するまでに成長することができ、感慨ひとしおです。母性看護学と老年看護学を新設の二つに教室に引き継いでいただき、平成15年度からは新しい教室員が新しいテーマで教室づくりを展開していくことと期待しております。

平成15年3月

杉下知子

1. 教育活動

1-1. 担当講義・実習

平成13年度家族看護学教室担当講義・実習一覧

[学部]

講義名	履修	単位	学年	開講時期および時間		
看護学の基礎と展開	教養学部総合科目 D 「人間・環境一般」	4	1,2	前期	木	16:20~17:50
看護実践活動入門	全学自由研究ゼミナール	2	1,2	集中講義	月-木	8:00~16:00
病態生理免疫学	看護選択必修・必修	1	3	前期II-3	木	9:00~12:10
母性看護学	看護必修・選択	分2	3	後期I-1	月	9:00~12:10
小児看護学	看護必修・選択	分2	3	後期I-2	月	9:00~12:10
家族看護学	看護必修・選択	2	3	後期II	火	13:00~16:10
老年看護学	看護必修	分2	3	後期II	月	9:00~12:10
老年看護学実習	看護必修	3	4	前期II	月-金	9:00~16:00
小児看護学	看護必修	分2	4	前期III	月	9:00~12:10
母性看護学	看護必修	分2	4	前期III	月	13:00~16:10
老年看護学	看護必修	分2	4	前期I	木	9:00~12:10
小児看護学実習	看護必修	2	4	後期	月-金	8:00~15:00
母性看護学実習	看護必修	2	4	後期	月-金	8:00~15:00

※開講時期

前期I	4月9日 ~ 6月1日	8週
前期II	6月4日 ~ 7月19日	7週
前期III	9月3日 ~ 10月19日	7週
後期I	10月22日 ~ 12月7日	7週
後期II	12月10日 ~ 2月8日	7週
後期III	2月12日 ~ 3月8日	4週

[大学院]

家族看護学特論I	4月~9月
家族看護学特論II	10月~2月

平成 14 年度家族看護学教室担当講義・実習一覧

[学部]

講義名	履修	単位	学年	開講時期および時間		
看護学の基礎 と展開	教養学部総合科目 D 「人間・環境一般」	4	1,2	前期	木	16:20~17:50
看護実践活動 入門	全学自由研究 ゼミナール	2	1,2	集中講義	月-木	8:00~16:00
病態生理免疫学	看護選択必修・必修	1	3	前期II-3	木	9:00~12:10
小児看護学	看護必修・選択	分2	3	後期I-2	月	9:00~12:10
家族看護学	看護必修・選択	2	3	後期II	火	13:00~16:10
老年看護学	看護必修	分2	3	後期II	月	9:00~12:10
老年看護学	看護必修	分2	4	前期I-1,2	木	9:00~12:10
老年看護学実習	看護必修	3	4	前期II	月-金	9:00~16:00
小児看護学	看護必修	分2	4	前期III	月	9:00~12:10
小児看護学実習	看護必修	3	4	後期	月-金	8:00~15:00

※開講時期

前期I	4月8日 ~ 5月31日	8週
前期II	6月4日 ~ 7月19日	7週
前期III	9月2日 ~ 10月18日	7週
後期I	10月21日 ~ 12月6日	7週
後期II	12月9日 ~ 2月7日	7週
後期III	2月10日 ~ 3月7日	4週

[大学院]

家族看護学特論I	4月~9月
家族看護学特論II	10月~2月

1-2. 卒業論文・修士論文・博士論文

平成 13 年度

卒業論文

山本真理子：

Measurement of time required for bathing-related care of the elderly with dementia : A pilot study in a nursing home in Japan.

修士論文

杉山智子：

アルツハイマー型中期痴呆症患者の ADL ケアへの抵抗に関する研究

福田泰子：

黄色ブドウ球菌伝播と医療従事者清潔行動の把握

平成 14 年

卒業論文

杉浦仁美：

携帯電話が中学生の心理・友人関係に与える影響

修士論文

深堀浩樹：

都内特別養護老人ホーム利用者家族の面会に関する研究

北野和代：

ターミナル期の患者と家族にかかわる看護師の感情

ベスッキ：

The Determinants of Health Insurance Coverage Among a Korean Christian Church in Tokyo

博士論文

河田みどり：

授乳期乳腺炎の感染経路とその予防に関する研究

論博

山下仁：

Clinical Study for Establishment of Safety Information on Acupuncture
.Prospective Surveys on Adverse Events-

2. 研究活動

2-1. 研究費

平成13年度，平成14年度，平成15年度文部科学省研究費助成金（基盤研究（B））「在宅病児・障害児と家族を対象とした地域連携型継続看護システムの実践モデル開発」（研究課題番号13470533）

杉下知子，上別府圭子（平成14年度），村田恵子，鳥居央子，大脇万起子，林邦彦

平成13年度，平成14年度 文部科学省研究費助成金（奨励研究（A））「介護者・要介護者間における前向きなケア循環への転換と促進を図る看護支援の検討．痴呆高齢者とその介護者に焦点をあてた支援．」（研究課題番号13771464）

小林奈美

平成13年度老人保健健康増進等事業・高齢者の自立支援及び元気高齢者づくりのための調査研究等事業による研究助成「痴呆高齢者の予後追跡調査研究」

杉下知子（委員長），丸井英二，松村康弘，林邦彦，山本精一郎，松井典子，吉田亮一，須貝佑一，橋谷トミ，田近松枝，嶋澤美鈴，渡邊祐紀

平成13年度社会福祉・医療事業団 長寿社会福祉基金助成事業「在宅で終末期ケアに臨む家族を支援するためのマニュアル作成事業」（社団法人：全国訪問看護事業協会）

杉下知子（委員長），上野桂子，鈴木和子，竹永和子，西島英利，渡辺裕子，竹永和子，渡辺裕子，岡部明子，河原宣子，小林奈美

平成14年度東京大学学術研究奨励資金東大シンポジウム開催経費助成3,500千円

杉下知子，栗田廣，高橋泰子，数間恵子，村嶋幸代，大江和彦，稲田紘，入村瑠美子，菅田勝也，萱間真美，上別府圭子，美代賢吾，松井典子

平成14年度老人保健健康増進等事業・高齢者の自立支援及び元気高齢者づくりのための調査研究等事業による研究助成「痴呆高齢者の予後追跡調査研究」

杉下知子（委員長），丸井英二，松村康弘，林邦彦，山本精一郎，水野陽子，吉田亮一，須貝佑一，橋谷トミ，田近松枝，嶋澤美鈴，渡邊祐紀，松井典子

平成14年度老人保健健康増進等事業「痴呆ケアにおけるリスクマネジメントに関する研究：痴呆性高齢者における転倒事故の要因と事故防止策の研究」5,270千円

須貝佑一（委員長），山本里美，岩本陽子，辰己祐介，千葉忍，橋谷トミ，町田沢子，池智智津子，松田洋子，板垣晃之，佐藤峰子，金井裕子，郡司和郎，妙圓菌晃，鈴木希衣子，高橋好美，五十嵐千冬，中山小夜子，小林奈美

平成 13 年度（第 11 回）財団法人医療科学研究所研究助成「施設サービスの質の家族による評価とその関連要因についての研究」500 千円

深堀浩樹，松井典子，杉下知子

2001 年度日本赤十字社医療センター奨励研究費「脊髄損傷女性の性に対する思いに関する研究」 80 千円

黒木寛子，松井典子

財団法人安田生命社会事業団 2002 年度研究助成「携帯 e メールが思春期の対人関係に及ぼす影響」500 千円

上別府圭子

平成 14 年度日本看護協会出版会研究助成金「第一相臨床試験を受ける悪性腫瘍患者の心理特性と CRC・看護師の役割」300 千円

松本和史，杉下知子，上別府圭子，山下直秀，濱尾房子，尾上裕子

平成 14 年度ファイザー受託研究「職場における慢性頭痛の実態調査」9,500 千円

原谷隆史，中田光紀，高橋正也，小川康恭，池田智子

2-2. 学術研究業績

論文(原著論文・総説)

Yamashita H., Tsukayama H., Sugishita C.: Local adverse reactions commonly seen in Japanese-style medical acupuncture practice, Clin Acupunct Orient Med, 2(2), 132-137, 2001

Yamashita H., Tsukayama H., White AR., Tanno Y., Sugishita C., Ernst E.: Systematic review of adverse events following acupuncture: the Japanese literature. Complementary Therapies in Medicine, 9: 98-104, 2001.

Yamamoto N.M., Sugishita C., Ishigaki K., Hasegawa K., Maekawa N., Kuniyoshi M., Hayashi K.: Development of instruments to measure appraisal of care among Japanese family caregivers of the elderly, Scholarly Inquiry for Nursing Practice, 15(2): 113-135, 2001.

Yamamoto N.M., Abe T., Okita Y., Hayashi K., Sugishita C., Kamata K.: Development of a Japanese quality of life instrument for older adults experiencing dementia (QLDJ). International Journal of Aging and Human Development. 55(1): 71-95, 2002

Yamashita H., Tsukayama H., Sugishita C.: Popularity of complementary and alternative medicine in Japan: a telephone survey. Complementary Therapies in Medicine, 10:84-93, 2002.

Kawada M., Okuzumi K, Hitomi S, and Sugishita C. : Transmission of staphylococcus aureus between healthy lactating mothers and their infants by breastfeeding. J. Human Lactation. (in press)

Kamibeppu K., Ono K, Go T: A case of postnatal depression with consequent difficulties in child-rearing: Intervention through psychotherapy and support system, Japanese Journal of Child and Adolescent Psychiatry, 44(Supplement), 2003(in press)

矢野久子, 広瀬幸美, 新村純子, 石黒千映子, 飯室美智子, 平井栄利子, 杉下知子, 小玉香津子, 松島肇:在宅医療廃棄物の適正処理に関する訪問看護ステーション管理者の意識および患者・家族の相談・指導内容.富山県の場合., 医療廃棄物研究 13(1・2):1-10, 2000

Wright LM, 杉下知子, 前原邦江, 大脇万起子:臨床ナースが患者・家族からの情報収集をいかに行うか, 看護展望, 26 (4), 417-424, 2001

小林奈美, 前原邦江, 法橋尚宏, 杉下知子:平成 12 年第 3 回家族看護ワークショップ°開催報告, 家族看護学研究, 6(2), 177-181, 2001

松本和史, 法橋尚宏, 杉下知子:訪問看護利用者と家族の間での MRSA 伝播および訪問看護婦・士の感染防止対策の検討, 日本公衆衛生雑誌 48(3):190-199, 2001

山下仁, 津嘉山洋, 丹野恭夫, 杉下知子:針灸の副作用, 医学のあゆみ, 196(10), 765-767, 2001

釧物祐子, 杉下知子:国際学術交流の進め方[4]口頭発表の方法, Quality Nursing, 7(4), 349-356, 2001

森那美子, 杉下知子:国際学術交流の進め方[5]ポスター発表の方法, Quality Nursing, 7(5), 440-445, 2001

前原邦江, 杉下知子:国際学術交流の進め方[6]海外短期研修, Quality Nursing, 7(6), 515-519, 2001

宮越幸代, 杉下知子:国際学術交流の進め方[7]タイのエイズ母子健康研究, Quality Nursing 7(7), 625-631, 2001

日下修一, 杉下知子:国際学術交流の進め方[8]フィールド・ワーク(2).イギリスでの文献収集, Quality Nursing, 7(8), 713-719, 2001

山下仁, 杉下知子:国際学術交流の進め方[9]英語論文の投稿, Quality Nursing, 7(9),

801-808, 2001

山本則子, 杉下知子: 国際学術交流の進め方[10]留学を経験して, Quality Nursing, 7(10), 885-889, 2001

飯田恭子, 杉下知子: 国際学術交流の進め方[11]国際学会参加報告, Quality Nursing, 7(11), 999-1003, 2001

杉下知子: 国際学術交流の進め方[12]国際カンファレンス, セミナーの開催, Quality Nursing, 7(12), 1089-1096, 2001

小林奈美, 杉下知子: 訪問看護婦による家族支援の確立を目指して-東京都および隣 3 県における調査報告-, コミュニティケア, 4(2), 64-67, 2002

小林奈美: 訪問看護婦による家族支援の確立を目指して-家族への問いかけ表現の検討 -, 保健の科学, 44(5), 355-360, 2002

小林奈美: 特集: 21 世紀の看護をリードする家族看護 家族看護を考え, 実践に役立つブックレビュー, 看護, 54(7), 130-137, 2002

山本則子, 石垣和子, 国吉緑, 河原宣子, 長谷川喜代美, 林邦彦, 杉下知子: 高齢者の家族における介護の肯定的認識と生活の質(QOL), 生きがい感および介護継続意思との関連: 続柄別の検討, 日本公衆衛生雑誌 49(7): 660-671, 2002

小林奈美, 杉下知子: 訪問看護師が在宅介護に取り組む家族と効果的に関わるための問いかけ表現の検討 家族看護学研究, 8(1), 17-22, 2002

杉下知子: 第一線の実地医家のための高齢者医療実践ガイド 第 1 章高齢者へのアプローチ-日常診療の基本-看護からみた高齢者医療, 内科総合誌 Medical Practice 臨時増刊号 19, 13-16, 2002

河田みどり, 杉下知子, 奥住捷子, 米山彰子, 木村哲: 健常な授乳女性における母乳中細菌の測定. 母性衛生 43(4): 479-487, 2002

池田智子, 中田光紀, 小堀俊一, 北條稔, 杉下知子: 小規模事業場業主のメンタルヘルス対策への意識と取り組み, 産業衛生学雑誌, 44, 200-207, 2002.

河田みどり, 杉下知子: 海外でのプレゼンテーションのプロセス—異文化交流に視点をあてて—, Quality of Nursing, 8(7), 613-617, 2002.

杉下知子, 河田みどり, 細坂泰子: 母性看護における感染予防対策, 感染防止, 13 (1), 37-48, 2003.

前原邦江, 法橋尚宏, 杉下知子: 出産後の母親の育児生活負担感と家族サポートのアセスメントツールの開発, 家族看護学研究, 8(2): 204-213, 2003.

上別府圭子: 母性の再考. 父親から虐待を受けていた女性と母親. 精神分析研究 47(1): 29-38, 2003.

上別府圭子: 小児がんの子どもに見る PTSD. 回復過程と予防的介入の試み.. 児童青年精神医学とその近接領域 44(1) : 49-63, 2003.

河田みどり, 法橋尚宏, 杉下知子: 用手的な分画搾乳法による母乳中細菌数の測定. 小児保健研究 62(2): 242-248, 2003

著書・編著・教科書ほか

杉下知子: 予防接種の基準(分担執筆), p635 / 免疫学辞典第2版, 東京化学同人, 2001.

小林奈美: 介護概論, p105-118 / 社団法人シルバーサービス振興会編: 在宅入浴サービス従事者研修テキスト, 中央法規, 2001.

小林奈美: 在宅療養のプロセスと援助の課題, p70-83 / 渡辺裕子編: 家族看護を基盤とした在宅看護論II 実践編, 日本看護協会出版会, 2002.

上別府圭子：防衛機制．動機づけ．感情・情緒，Pp66-73，来談者中心療法，p178-185/
加藤伸司・中島健一編著：社会福祉養成テキストブック 13「心理学」，ミネルヴァ書
房，2002．

上別府圭子：無差別微笑，p456-457，欲求不満，p482-483，リフレエリング〔情緒的燃
料補給〕，p493/小此木啓吾編：精神分析事典，岩崎学術出版社，2002．

上別府圭子：死にゆく子どもと家族へのケア，p428-440/牛島定信，栗田広他編：現代
児童青年精神医学，永井書店，2002．

上別府圭子：人間としての発達，p7-16/杉下知子，武藤安子監修：発達と保育．育つ・
育てる・育ち合う，2003.3．検定済．高等学校家庭科1～3年，教科書番号「家庭020」，
教育図書株式会社，2003．

研究会議・報告書など

杉下知子，山本則子，熊田衛：虚弱高齢者の運動機能性及び自律神経活動を高める下
肢受動運動機器の開発．平成11年度文部省科学研究費補助金(基盤研究 B2:課題番号
11557208)研究成果報告書，2002

痴呆高齢者の予後追跡調査委員会(委員長:杉下知子，委員:松井典子 他):痴呆高齢
者の予後追跡調査報告書，2001

在宅で終末期ケアに臨む家族を支援するためのマニュアル作成事業(委員長:杉下知子，
委員:小林奈美 他):在宅で終末期ケアに臨む家族を支援するためのマニュアル～高
齢者の終末期を支える家族への支援～，社団法人全国訪問看護事業協会 2001

痴呆性高齢者の予後追跡調査委員会(委員長:杉下知子，委員:松井典子 他):痴呆性
高齢者の予後追跡調査報告書，2002

学会・研究発表

Yamashita H, Tsukayama H, Sugishita C, Park J, White AR, Ernst E: Needle
companies' attitude towards acupuncture safety issues: a questionnaire survey,

International Conference on Complementary, Alternative & Integrative Medicine Research, 2001年5月17-19日, San Francisco, U.S.A

Kobayashi N.: Working with Families is Natural: A Research Framework for Japanese Home Visiting Nursing, 4th International Nursing Research Conference, 2001年8月29-31日, Mie, Japan

Matsui N., Sugishita C., Noda R., Kita S., Miyamoto E.: The effect of the use of an anemia prevention brochure for pregnant women, 4th International Nursing Research Conference, 2001年8月29-31日, Mie, Japan

Hohashi N, Sugishita C.: The effects of family function in cases involving mothers accompanying children in wards utilizing FFFS, 4th International Nursing Research Conference, 2001年8月29-31日, Mie, Japan

Maehara K, Sugishita C.: Development of a two-dimensional tool for assessment of mother and family functioning after childbirth (TTA-MF), 4th International Nursing Research Conference, 2001年8月29-31日, Mie, Japan

Yamashita H., Tsukayama H., Sugishita C.: Analysis of incident reports on forgotten needles in acupuncture treatment, 8th Annual Symposium on Complementary Health Care, 2001年12月6-8日, Exeter, U.K.

A. Kumai, N. Matsui, K. Saeki, S. Kazue, M. Takahashi, C. Hyogo, S. Kita, E. Miyamoto, R. Noda . The effect of Kangaroo Care for full-term infants to promote breastfeeding. ICM 26th Triennial Congress. 2002年4月14-18日, Vienna, Austria

T. Asaka, N. Matsui, N. Kuroki, K. Unoki, M. Adachi, E. Iwatsubo, C. Komiyama, T. Aizawa, R. Noda . Sexual activity of women with spinal cord injury. ICM 26th Triennial Congress. 2002年4月14-18日, Vienna, Austria

N. Matsui , Y. Hada , J. Hamaji , N. Kato , Y. Shimada , H. Cho , H. Masuda , C. Sugishita , T. Aizawa . The Effect of Perinatal Education for Fathers to Promote

the Housework and Baby Support. ICM 26th Triennial Congress. 2002年4月14-18日, Vienna, Austria

S. Pae, N. Matsui, T. Hashitani, Y. Sugai, C. Sugishita, Therapeutic communication techniques used by experienced and inexperienced care workers toward the elderly in a long term care facility. The 55th annual meeting of Gerontological Society of America. 2002年11月22-26日, Boston America

Ikeda T, Sugishita C, et al: Medical access for Japanese employees:-An analysis by enterprise size. The 5th Interdisciplinary conference on occupational stress and health, 2003年3月20-22日, Toronto, Canada

法橋尚宏, 原田幸一, 杉下知子, 岩田力: 東京都A区におけるアレルギー健康診査の追跡調査-アレルギー疾患別にみた有病率およびその変化について-, 日本小児看護学会第11回学術集会, 2001年7月27-28日, 兵庫県神戸市

小林奈美, 杉下知子: 訪問看護婦による家族支援の確立を目指して-東京都および近隣3県における調査報告- 第1報:介護保険制度施行後の訪問の状況と施行前後で変化したこと, 日本家族看護学会第8回学術集会, 2001年9月8-9日, 千葉県千葉市

小林奈美, 杉下知子: 訪問看護婦による家族支援の確立を目指して-東京都および近隣3県における調査報告- 第2報:印象に残っている家族との関わりと家族への問いかけ表現の検討, 日本家族看護学会第8回学術集会, 2001年9月8-9日, 千葉県千葉市

大脇万起子, 池田亜希子, 杉下知子:障害児の母親が求める援助についての一考察. 振り返り調査の結果から-, 日本家族看護学会第8回学術集会, 2001年9月8-9日, 千葉県千葉市

鳥居央子, 森秀子, 杉下知子:家族と家族看護についての看護職者の認識, 日本家族看護学会第8回学術集会, 2001年9月8-9日, 千葉県千葉市

福田泰子, 高橋廣美, 杉下知子: 手洗い:質問紙調査を中心として, 第42回日本母性衛生学会学術集会, 2001年9月28日, 大阪府大阪市

内藤直子, 杉下知子, 稲葉裕: 相対心拍率とバースリラックス評価表による産婦リラックスの研究, 第42回日本母性衛生学会学術集会, 2001年9月28日, 大阪府大阪市

内藤直子, 稲葉裕, 杉下知子: 産婦と助産婦にバースリラックス評価表を用いた産婦リラックスの研究, 第42回日本母性衛生学会学術集会, 2001年9月28日, 大阪府大阪市

加藤澄子, 松井典子, 杉下知子, 壹岐宮子, 池田梨絵, 鈴木晴香, 内藤美奈子, 水口裕美子, 野田蓮子: 妊娠中における歩行運動と水泳がと妊娠・分娩に与える影響, 第42回日本母性衛生学会学術集会, 2001年9月28日, 大阪府大阪市

江藤美樹, 松井典子, 杉下知子, 奥山奈苗, 上野千恵美, 水野美穂, 藤江幸子, 宮本江利子: 分娩期の過ごし方に関する情報提供が分娩に与える影響, 第42回日本母性衛生学会学術集会, 2001年9月28日, 大阪府大阪市

横森美里, 松井典子, 杉下知子, 渡部聖子, 平井直子, 保科恵, 平川真裕美, 宮本江利子: 分娩時間自己評価に影響を及ぼす因子に関する検討, 第42回日本母性衛生学会学術集会, 2001年9月28日, 大阪府大阪市

羽田有香子, 松井典子, 杉下知子, 濱地純子, 加藤則子, 嶋田有生子, 趙嬉瑛, 増田ひとみ, 相沢貴子: 父親の出産準備教育の受講が家事・育児への主体的な参加に与える影響, 第42回日本母性衛生学会学術集会, 2001年9月28日, 大阪府大阪市

熊井秋穂, 松井典子, 杉下知子, 下田和恵, 佐伯薫, 高橋美帆, 兵庫千夏, 喜多里已: カンガルーケアが退院時および生後一ヶ月時の母乳栄養継続に及ぼす影響, 第42回日本母性衛生学会学術集会, 2001年9月28日, 大阪府大阪市

桜井亜古, 宮崎暁子, 本野純子, 松井典子, 杉下知子, 喜多里已: 産後尿失禁の発症に影響を及ぼす因子に関する検討, 第42回日本母性衛生学会学術集会, 2001年9月28日, 大阪府大阪市

本野純子, 松井典子, 杉下知子, 桜井亜古, 宮崎暁子, 喜多里已: 産褥ベルトの使用

状況に関する実態調査, 第42回日本母性衛生学会学術集会, 2001年9月28日, 大阪府大阪市

川村恵美子, 松井典子, 杉下知子, 片林雅代, 濱田真由美, 竹内暢子, 畠山幸子, 相沢貴子: 大学生の性に関する価値観と避妊に関する知識・行動・の関係, 第42回日本母性衛生学会学術集会, 2001年9月28日, 大阪府大阪市

足立めぐみ, 松井典子, 杉下知子, 黒木寛子, 鶴木桂子, 浅香知子, 野田蓮子: 年齢別にみた独身女性の性に関する実態調査, 第42回日本母性衛生学会学術集会, 2001年9月28日, 大阪府大阪市

鶴木桂子, 松井典子, 杉下知子, 黒木寛子, 足立めぐみ, 浅香知子, 野田蓮子: 満足度別にみた独身女性の性に関する実態調査, 第42回日本母性衛生学会学術集会, 2001年9月28日, 大阪府大阪市

浅香知子, 松井典子, 杉下知子, 鶴木桂子, 足立めぐみ, 黒木寛子, 野田蓮子: 独身女性における性欲と性行為の実態・認識との関連, 第42回日本母性衛生学会学術集会, 2001年9月28日, 大阪府大阪市

黒木寛子, 松井典子, 杉下知子, 足立めぐみ, 井上房枝, 鶴木桂子, 浅香知子, 野田蓮子: 脊髄損傷女性の性に関する事例検討, 第42回日本母性衛生学会学術集会, 2001年9月28日, 大阪府大阪市

浅香知子, 松井典子, 杉下知子, 黒木寛子, 足立めぐみ, 鶴木桂子, 岩坪暎二, 野田蓮子: 結婚歴別にみた脊髄損傷女性の性の実態に関する検討, 第42回日本母性衛生学会学術集会, 2001年9月28日, 大阪府大阪市

杉山智子, 松井典子, 須貝佑一, 磯野浩, 古田伸夫, 池知智津子, 杉下知子: アルツハイマー型中期痴呆症患者に対するADLケアへの抵抗時におけるスタッフのかかわりがケアの達成に与える影響, 第17回日本老年精神医学会, 2002年6月27-28日, 石川県金沢市

藤澤文子, 松井典子, 浅香知子, 高橋英恵, 野田蓮子: 更年期症状と更年期女性の心

理との関連，第 43 回日本母性衛生学会，2002 年 9 月 6 日，北海道旭川市

高橋英恵，松井典子，浅香知子，藤澤文子，野田蓮子：更年期の自己認識と更年期症状および心理との関連，第 43 回日本母性衛生学会，2002 年 9 月 6 日，北海道旭川市

佐藤千夏，松井典子，堤有美子，佐野やよい，一瀬いつ子，村上睦子，相澤貴子：父親の背景が父性意識の形成に与える影響，第 43 回日本母性衛生学会，2002 年 9 月 6 日，北海道旭川市

上運天愛子，松井典子，浅香知子，寺尾希美，藤原千鶴子，藤原千鶴子，牧野央緒，村上由美，野田蓮子：人工妊娠中絶のビデオ視聴が避妊行動の変容に与える影響，第 43 回日本母性衛生学会，2002 年 9 月 6 日，北海道旭川市

菊地由梨，松井典子，川田涼子，木村佳代子，熊本桂子，土屋友紀恵，村田亜矢子，村上睦子，貴家江，宮本江利子：トイレ様式が分娩所要時間へ及ぼす影響，第 43 回日本母性衛生学会，2002 年 9 月 6 日，北海道旭川市

中村晃土，牛島定信，縣俊彦，清水英佑，上別府圭子：大学生の自己評価，SUGI-2002，2002 年 8 月 1 日，東京

上別府圭子：手術体験を再現し病を受容していった心臓疾患女兒の一例（中農浩子）に対する（指定討論），日本心理臨床学会第 21 回大会，2002 年 9 月 6 日，愛知県名古屋市

上別府圭子：現実への逃避により治療が中断した慢性抑うつ女性患者の治療過程（小土井直美）に対する（助言），日本精神分析学会第 48 回大会，2002 年 10 月 12 日，福岡県福岡市

深堀浩樹 小林奈美 林邦彦，丸井英二，松村康弘，山本精一郎，吉田亮一，須貝佑一，渡邊祐紀，杉下知子：特別養護老人ホーム利用者家族の利用開始時の面会希望の関連要因，第 61 回日本公衆衛生学会総会，2002 年 10 月 23-25 日，埼玉県さいたま市

ペスツキ，松井典子，橋谷トミ，須貝佑一，杉下知子：都内 B 特別養護老人ホーム開設

時における新卒介護職の職務特性・モラルと抑うつ状態の関連，第7回日本老年看護学会学術集会，2002年11月3-4日，神奈川県藤沢市

深掘浩樹，松井典子，嶋澤みすず，須貝佑一，杉下知子：都内A特別養護老人ホームが提供するサービスの質の家族による評価に関する質的研究，第7回日本老年看護学会学術集会，2002年11月3-4日，神奈川県藤沢市

杉山智子，松井典子，須貝佑一，渡辺幸子，池知千津子，杉下知子：ADLケアの抵抗時におけるケアスタッフのかかわり特性～アルツハイマー型中期痴呆症患者に注目して～，第7回日本老年看護学会学術集会，2002年11月3-4日，神奈川県藤沢市

中村晃士，牛島定信，上別府圭子：健常青年の自己評価に対する完全主義傾向と自己愛傾向の意義について，第43回日本児童青年精神医学会総会，2002年11月28日，東京

吉村奏恵・上別府圭子：学校現場での虐待の発見（助言者），日本子どもの虐待防止研究会第8回学術集会東京大会，2002年12月7日，東京

講演・シンポジウムなど

Yamashita, H., Tsukayama, H., Kimura, T., Hori, N., Sugishita, C.: Side effect information on acupuncture: a prospective survey on adverse reactions, The 11th International Congress of Oriental Medicine, 2001年10月11-14日, Seoul, Korea

Matsui, N., Sugishita, C.: Qualitative Assessment of Autonomic Nervous Activity of Cardiovascular System, Joint International Conference Tokyo University Oita University & S.N.U: Evidence-based Nursing Research, 2001年12月13-14日, Seoul, Korea

松井典子：看護研究とは，東京都立駒込病院看護部院内研修実践コース看護研究研修，2001年4月26日，東京

松井典子：研究計画書について(1)，東京都立駒込病院看護部院内研修実践コース看護

研究研修,2001年6月18日,東京

松井典子:研究計画書について(2),東京都立駒込病院看護部院内研修実践コース看護
研究研修,2001年7月25日,東京

小林奈美:リハビリ期における家族看護,社会福祉法人恩賜財団済生会,2001年10月5
日,東京

杉下知子_他:「骨と関節の日」市民公開講座(パネルディスカッション).もうこわくない
骨粗鬆症.,産経新聞社・東京都臨床整形外科医会,2001年10月8日,東京

松井典子:研究結果のまとめ方(1),東京都立駒込病院看護部院内研修実践コース看護
研究研修,2001年10月15日,東京

小林奈美:介護に必要な医学の知識,社会福祉法人文京区社会福祉協議会,2001年10
月29日,東京

松井典子:研究のまとめ方(2),東京都立駒込病院看護部院内研修実践コース看護研究
研修,2001年11月12日,東京

杉下知子:看護学・保健学、特に家族看護からみた予防接種のあり方,第48回日本小
児保健学会,2001年11月17日,東京

杉下知子:家族看護学の理論と実践について,東京都立大塚病院「周産期看護」エキスパ
ートナース育成研修,2001年,東京

小林奈美:あなたも介護,私も介護(男女共同参画からみた介護のあり方),文京区役所,
2001年11月3,10,17日,東京

小林奈美:介護職と看護職の効果的な連携,社団法人日本看護協会,看護教育・研究セ
ンター,2001年11月21日,東京

松井典子:研究発表について,東京都立駒込病院看護部院内研修実践コース看護研究研

修，2001年12月3日，東京

小林奈美：第11回看護研究実践報告会(講評)，東京都看護協会東部地区支部看護研究委員会，2002年2月16日，東京

松井典子：看護研究発表，東京都立駒込病院看護部院内研修実践コース看護研究研修，2002年2月22日，東京

松井典子：看護研究とは，東京都立駒込病院看護部院内研修実践コース看護研究研修，2002年4月26日，東京

小林奈美：介護職と看護職の効果的な連携，社団法人日本看護協会，看護教育・研究センター，2002年5月13日，東京

松井典子：研究計画書について，東京都立駒込病院看護部院内研修実践コース看護研究研修，2002年6月20日，東京

小林奈美：管理者研修（介護職と看護職の効果的な連携），社団法人日本看護協会，看護教育・研究センター，2002年6月20日，東京

小林奈美：介護支援専門員研修「家族との関わり方」，文京区役所，2002年7月19日，東京

上別府圭子：妊婦相談カウンセリング的演習，全国保健センター連合会妊産婦体操研究委員会主催「第11回妊産婦体操実践指導員養成講習会」，2002年8月7日，東京

松井典子：研究結果のまとめ方，東京都立駒込病院看護部院内研修実践コース看護研究研修，2002年9月9日，東京

上別府圭子：母子訪問におけるカウンセリング的演習，日本助産師会埼玉支部・埼玉県共催「母子訪問指導者講習会」，2002年9月27日，埼玉

小林奈美：リハビリ期における家族看護，社会福祉法人恩賜財団済生会，2002年10月2

日，東京

松井典子：研究のまとめ方，東京都立駒込病院看護部院内研修実践コース看護研究研修，平成13年10月10日，東京

松井典子：研究結果の検討，東京都立駒込病院看護部院内研修実践コース看護研究研修，平成13年12月2日，東京

杉下知子：日本の家族看護学のあゆみ，家族看護学ワークショップ2002，2002年12月19日，東京

上別府圭子：子どもの医療 PTSD への介入，家族看護学ワークショップ2002，2002年12月19日，東京

小林奈美：15分以内でできる家族インタビュー-訪問看護実践への応用-，千葉大学大学院看護学研究科訪問看護学分野，2003年1月15日，千葉

小林奈美：第12回看護研究実践報告会(講評)，東京都看護協会東部地区支部看護研究委員会，2003年2月15日，東京

杉下知子：平成14年度東大シンポジウム「看護学の新展開—情報学とのドッキング—」看護学の新しい展開—情報学とともに—(基調講演)，2003年2月20日，東京

松井典子：看護研究発表，東京都立駒込病院看護部院内研修実践コース看護研究研修，2003年2月25日，東京

一般雑誌・新聞・その他

杉下知子，他：年齢からくる骨粗鬆症予防と対策，平成13年11月11日，産経新聞，p21，2001

小林奈美：私の一冊「ビリーフ-家族看護実践の新たなパラダイム」，2003年1月1日発行，月刊「家族ケア」，p29，2002

上別府圭子：書評「医療の中の心理療法—こころのケアとチーム医療」, 精神療法 28(2), 111-112, 2002

上別府圭子：書評「心理療法と臨床心理行為」, 精神療法 28 (4), 514-515, 2002

上別府圭子：無意識の発見/牛島定信監修：現代精神分析学，放送大学（ラジオ）

上別府圭子：女性精神分析家の貢献/牛島定信監修：現代精神分析学，放送大学（ラジオ）

上別府圭子：精神分析的発達理論/牛島定信監修：現代精神分析学，放送大学（ラジオ）

2-3. 学内外の公的活動

杉下知子

- 1986年- 日本小児保健学会幹事
- 1989年- 日本小児保健学会評議委員・予防接種委員
- 1994年- 日本家族看護学会理事長
- 1997年- 東京都母子保健審議会委員
- 1998年- ホームケア研究会会長
- 2000年- 痴呆高齢者の予後追跡調査研究委員長
- 2002年- 平成14年度東大シンポジウム「看護学の新展開—情報学とのドッキング」組織委員長

上別府圭子

- 1998年- 日本児童青年精神医学会編集委員
- 1999年- 子どもの虐待を考える会（NPO）顧問
- 2000年- 日本児童青年精神医学会評議員
- 2002年- 第99回日本精神神経学会プログラム委員
- 2002年- 日本精神衛生学会理事
- 2002年- 平成14年度東大シンポジウム「看護学の新展開—情報学とのドッキング」組織委員
- 2003年- 日本精神衛生会「こころと社会」編集委員
- 2003年- 第44回日本児童青年精神医学会プログラム委員

小林奈美

- 2001年- 日本家族看護学会幹事（庶務担当）
- 2002年- 痴呆ケアにおけるリスクマネジメントに関する研究：痴呆性高齢者における転倒事故の要因と事故防止策の研究，委員

松井典子

- 2001年- 日本母性衛生学会幹事
- 2001年- 日本母性衛生学会編集委員
- 2001年- 日本家族看護学会幹事（会員管理担当）
- 2001年- 痴呆性高齢者の予後追跡調査委員会，委員
- 2002年- 平成14年度東大シンポジウム「看護学の新展開—情報学とのドッキング」組織委員

座長・司会

- 2002年9月6日 松井典子座長，第43回日本母性衛生学会学術集会「妊娠・分娩・産褥22」
- 2002年11月28日 上別府圭子司会，第43回日本児童青年精神医学会総会「児童虐待」
- 2002年12月19日 杉下知子司会 第4回家族看護ワークショップ
- 2003年2月20日 杉下知子司会 平成14年度東大シンポジウム「看護学の新展開－情報学とのドッキング－」招聘講演「Informatics Supports Nursing Practice, Education, and Resarch」演者

2-4. 国際交流活動

Joint International Conference Tokyo University Oita University &, S.N.U:
Evidence-based Nursing Research

2001年12月13-14日, Seoul, Korea

Family Nursing Externship Family Nursing Unit University of Calgary,
2002年5月6-10日, 参加者: 小林奈美, Calgary, Canada

Family Nursing Externship -Level II- Family Nursing Unit University of Calgary
2002年10月30日-11月1日, 参加者: 小林奈美, Calgary, Canada

Family Nursing Workshop 2002 “Illness Beliefs Model for Advanced Practice”
Guest Speaker: Dr. Lorraine M.Wright (University, of, Calgary)

The Todai International Symposium. New Development on Nursign Infomatics
2003年2月20-21日, The University of Tokyo, Tokyo, Japan

2-5. 海外学術活動援助

平成 11 年度より、大学院生・卒論生の主として海外学術活動を推進するため、家族看護学教室（杉下奨励金）から当該活動援助を行っている。

平成 13 年度

福田泰子

発表形態：口演発表 援助額：20,000 円

福田泰子，高橋廣美，杉下知子：手洗い：質問紙調査を中心として，第 42 回日本母性衛生学会学術集会

2001 年 9 月 28 日，大阪府大阪市

平成 14 年度

池田智子（博士 2 年）

発表形態：ポスター発表 援助額：42,500 円

Ikeda T, Sugishita C, et al: Medical access for Japanese employees:-An analysis by enterprise size. The 5th Interdisciplinary conference on occupational stress and health

2003 年 3 月 20-22 日，Toronto, Canada

3. 教室カンファレンス

2001 年度

4 月 24 日

福田泰子（研究経過報告）

周産期における MRSA 伝播経路と感染予防対策の検討－医療従事者・病棟環境・妊産褥婦と新生児を対象として－

百合野秀朗（話題提供）

Stuart Humphries, David J. Stevens: Out with a hang, *Nature*, 410, 758-759, 2001.

Raphael Mechoulam, Easter Frider: A hunger for cannabinoids, *Nature*, 410, 763-765, 2001.

Clarence A. Ryan: Night moves of pregnant moths, *Nature*, 410, 530-1, 2001.

John Whitfield: BRAIN: Kids' got rhythm, *BioNews*, 12, 2001.

5 月 1 日

松井典子（原著抄読）

Karen Hooker, PhD, Margaret Manoogian-O' Dell Med, et al.: Dose Type of Disease Matter? Gender Differences Among Alzheimer's and Parkinson's Disease Spouse Caregivers, *The Gerontologist*, 40(5), 568-573, 2000.

Jeff C. Huffman, MD, and, Mark E. Kunik, MD: Assessment and Understanding of Pain in Patients with Dementia, *The Gerontologist*, 40(5), 574-581, 2000.

Marshall J. Graney and Veronica F. Engle: Stability of Performance of Activities of Daily Living Using the MDS, *The Gerontologist* 40(5), 582-586, 2000.

Muriel B. PhD, RN, FAAN, Mariah Snyder, PhD, RN, FAAN, Cynthia R. Gross, PhD, Kay Savik, MS, et al.: Value-Added Outcomes: The Use of Advanced Practice Nurse in Long-Term Care Facilities, *The Gerontologist* 40(6), 654-662, 2000.

Valerie Braithwaire, PhD: Contextual or General Stress Outcomes: Making Choices through Caregiving Appraisals, *The Gerontologist* 40(6), 706-717, 2000.

福田泰子（原著抄読）

T. Mitsuda, K. Arai, M. Ibe, T. Imagawa, N. Tomoko and S. Yokota.: The influence of methicillin-resistant *Staphylococcus aureus* (MRSA) carries in a nursery and transmission of MRSA to their households, *Journal of Hospital Infection*, 42(1):45-51, 1999.

VandeenBergh MF, Yzerman EP, et al.: Follow-Up of *Staphylococcus aureus* Nasal Carriage after 8 Years: Redefining the Persistent Carrier State, *Journal of Clinical Microbiology*, 37(10) 3133-3140, 1999.

百合野秀朗（話題提供）

Cameron K.Ghalambor, Thomas E.Martin: When to Abandon Your Nest, *Science*, 2001, April.

Karen McComb, et al.: Elephant Elders Deserve Respect, *Science*, 2001 April.

Evan Balaban: Bird Brain Transplants, *Science*, 2001, April.

Takao Inoue: Probing the brains of Ancient Japanese, *Science*, 292, 635, 2001, April.

5月8日

河田みどり (原著抄読)

M.H.Wilcox, P.Fitzgerald, J.Freeman, M.Denton, A.B.Gill, et al.: A five year outbreak of methicillin-susceptible *Staphylococcus aureus* phage type 5385 in a regional neonatal unit, *Epidemiology Infection*, 124(1), 37-45, 2000.

小林奈美 (原著抄読)

Anna-Karin Edberg, Ingalill R. Hallberg: Actions seen as demanding in patients with severe dementia during one year of intervention. Comparison with controls, *International Journal of Nursing Studies*, 35(5), 271-285, 2001.

Kerstin Blomqvist, Ingalill R. Hallberg: Recognising pain in older adults living in sheltered accommodation: the views of nurses and older adults, *International Journal of Nursing Studies*, 38(3), 305-318, 2001.

Celine Goulet, Helene Gevry, Robert J. Gautier, Linda Lepage, William Fraser, Marilyn Aita: A controlled clinical trial of home care management versus hospital care management for preterm labour, *International Journal of Nursing Studies*, 38(3), 259-269, 2001.

Eija Paavilarinen, Paivi Astedt-Kurki, Marita Paunonen-Ilmonen, Pekka Laippala: Risk factors of child maltreatment within the family: towards a knowledgeable base of family nursing, *International Journal of Nursing Studies*, 38(3), 297-303, 2001.

Sinead Keeney, Felicity Hasson, Hugh P. McKenna: A critical review of the Delphi technique as a research methodology for nursing, *International Journal of Nursing Studies*, 38(2), 195-200, 2001.

百合野秀朗 (話題提供)

Yu Seun Kim, Jang II Moon, Dong Kee Kin, et al.: Ratio of donor kidney weight to recipient bodyweight as an index of graft function, *Lancet*, 357, 1180-1181, 2001.

5月15日

北野和代 (原著抄読)

Pamela S.Hinds, PhD, RN, CS, et al.: End-of-life Decision Making by Adolescents Parents and Healthcare Providers in Pediatric Oncology: Research to evidence-based practice guidelines, *Cancer Nursing*, 24(2), 122-134, 2001.

Darlene M.Pawlik Plank, RN, MSN: The Research Nurse Role in a Clinical-Based Oncology Research setting, *Cancer Nursing*, 23(4), 286-292, 2000.

Mary Jo Dropkin, PhD, RN: Anxiety, Coping Strategies, and Coping Behaviors in Patients Undergoing Head and Neck Surgery, *Cancer Nursing*, 24(2), 143-148, 2001.

深堀浩樹 (原著抄読)

Karin A.M.Ringsberg, Per Gardsell, Olof Johnell, Per-Olof Josefsson, Karl J.Obrant: The Impact of Long-Term Moderate Physical Activity on Functional Performance Bone Mineral Density and Fracture Incidence in Elderly Women, *Gerontology*, 47(1), 15-20, 2001

Gideon Charach, Alexander Greenstein, Pavel Rabinovich, et al.: Alleviating Constipation in the Elderly Improves Lower Urinary Tract Symptoms, *Gerontology*, 47(2), 72 -76, 2001

Shu-Chen Li, Steven H.Aggen, John R.Nesselroade, Paul B.Baltes: Short-Term Fluctuations in Elderly People's Sensorimotor Functioning Predict Text and Spatial Memory Performance:The MacArthur Successful Aging Studies, *Gerontology*, 47(2), 100-116, 2001.

百合野秀朗 (話題提供)

Robin A.Weiss: Polio Vaccines exonerated, *Nature*, 410, 1035-1036, 2001.

5月22日

杉山智子 (研究経過報告)

痴呆高齢者の問題行動に対するケアについて

百合野秀朗 (話題提供)

Marcos Frank: While You Were Sleeping, *Science*, 2001, April.

Nathan Brody: Long Live the Brains, *Science*, 2001, April.

Stanislav Vorel: Drug Craving in memory center, *Science*, 2001, May.

Michael Schwarzschild, Jiang-Fan Chen: Caffeine Appears to Protect Neurons, *Science*, 2001, May.

5月29日

ベスッキ

Francine Ducharme, N., PhD: Longitudinal Changes in Conjugal Support and Support and Coping Behaviors of Elderly Marital Partners, *Journal of Family Nursing*, 1(3), 281-302, 1995.

Vicki S. Conn, PhD, RN, Jane S. Armer, PhD, RN: Older Spouses: Similarity of Health Promotion Behaviors, *Journal of Family Nursing*, 1(4), 397-414, 1995.

Susanne Frost Olsen, PhD, et al.: Support Communication and Hardiness in Families with Children with Disabilities, *Journal of Family Nursing*, 5(3), 275-291, 1999.

山下仁

Thomas KJ, Nicholl JP, Coleman P: Use and expenditure on complementary medicine in England: a population based survey, *Complementary Therapies in Medicine*, 9(1), 2-11, 2001.

Furnham A.: How the public classify complementary medicine: a factor analytic study, *Complementary Therapies in Medicine*, 8(1), 82-87, 2000.

Northim AJ, Fonnebo V: A survey of acupuncture patients: results from a questionnaire among a random sample in the general population in Norway, *Complementary Therapies in Medicine*, 8(3), 187-192, 2000.

百合野秀朗 (話題提供)

Angela Pirisi: Meaning of morning sickness still unsettled, *Lancet*, 357, 1272, 2001.

6月5日

矢野ひろみ (原著抄読)

Nicholas G. Castel, PhD: Differences in Nursing Homes with Increasing and decreasing Use of Physical Restraints, *Medical Care*, 38(2), 1154-1163, 2000.

百合野秀朗 (話題提供)

Tom Clarke: Chimps touched by television, *Nature*, 2001, April.

JW: Life after death, *Nature*, 2001, May.

Helen Pearson: Jet setting drains brain, *Nature*, 2001, May.

6月12日

杉山智子 (原著抄読)

Diana Keatringe, RN, RSCN, MAdmin, PhD et al.: The manifestation and nursing management of agitation in institutionalised residents with dementia, *International Journal of Nursing Practice*, 6(1), 16-25, 2000.

Byron Bair, MD, Weldonna Toth, MN, MS, Mary Ann Johnson, APRN, PhD, et al.: Interventions for disruptive behaviors: use and success. *Journal of Gerontological Nursing*, 25(1), 13-21, 1999.

涌水理恵 (原著抄読)

Jane Dimmitt Champion, Jeanna piper, Rochelle N.shain, Sondra T.perdue, Edward R.Newton: Minority Women with Sexually Transmitted Disease: Sexual Abuse and Risk for Pelvic Inflammatory Disease, *Research in Nursing & Health*, 24(1), 38-43, 2001.

Susan Gennaro, Patricia Dunphy, Maureen Dowd, William Fehder, Steven D. Douglas: Postpartum Smoking Behaviors and Immune Response in Mothers of Term and Preterm Infants, *Research in Nursing & Health*, 24(1), 9-17, 2001.

Bernadette Marzurek Melnyk and Nancy Fischbeck Feinstein: Mediating Functions Maternal Anxiety and Participation in Care on Young Children's Posthospital Adjustment, *Research in Nursing & Health*, 24(1), 18-26, 2001.

百合野秀朗（話題提供）

Martin Enserink: Whooping Cough Beats Vaccine, *Science*, 2001, June.

Dan Ferber: Genetic Clue to Schizophrenia, *Science*, 2001, May.

6月19日

杉山智子（研究経過報告）

痴呆高齢者の問題行動に対する効果的なケア方法について

細坂泰子（研究経過報告）

周産期における黄色ブドウ球菌の伝播経路と感染予防対策の検討。医療従事者・病棟環境・妊婦褥婦とその新生児を対象として。

百合野秀朗（話題提供）

Elysee T M Hille, A Lya den Ouden, Saroj Saigal et al.: Behavioural problems in children who weigh 1000g or less at birth in four countries, *Lancet*, 357, 1641-1643, 2001.

7月10日

松井典子（原著抄読）

Mary R. Janevic, MPH and Cathleen M. Connell, PhD: Racial Ethnic and Cultural Differences in the Dementia Caregiving Experience: Recent Findings, *The Gerontologist*, 41(3), 334-347, 2001.

Kim Shifren, PhD: Early Caregiving and Adult Depression: Good News for Young Caregivers, *The Gerontologist*, 41(2), 188-190, 2001.

涌水理恵（原著抄読）

Barbara Resnick: Testing a Model of Exercise Behavior in Older Adults, *Research in Nursing & Health*, 24(2), 83-92. 2001,

百合野秀朗（話題提供）

Mark Springer: Turning Back the Telomere Clock. PNA Probes Reveal Longer Life Spans for Cells of Calf Clones, *Nature*, June, 2001.

Helen Pearson: Sticky moments for earwax, *Nature*, June, 2001.

7月17日

北野和代（原著抄読）

John Costello: Nursing older dying patients: findings from an ethnographic study of death and dying in elderly care wards, *Journal of Advanced Nursing*, 35(1), 59-68, 2001.

Wallos Jansson, Gunilla Nordberg, et al.: Patterns of elderly spousal caregiving in dementia care: an observational study, *Journal of Advanced Nursing*, 34(6), 804-812,

2001.

深堀浩樹 (原著抄読)

Michelle A. Liken: Critical Incidents Precipitating Institutionalization of a Relative with Alzheimer's, *Western Journal of Nursing Research*, 23(2), 163-178, 2001.

Donna L. Algase, Elizabeth R.A. Beattie, Barnara Therrien: Impact of Cognitive Impairment on Wandering Behavior, *Western Journal of Nursing Research*, 23(3), 283-295, 2001.

Pamela G. Hawranik, Laurel A. Strain: Cognitive Impairment Disruptive, Behaviors and Home Care Utilization, *Western Journal of Nursing Research*, 23(2), 148-162, 2001.

7月24日

河田みどり (原著抄読)

Didier Pittet, Stephane Hugonnet, Stephan Harbarth, et al.: Effectiveness of a hospital-wide programme to improve compliance with hand hygiene, *The Lancet*, 356, 1307-1312, 2000.

ペスッキ (原著抄読)

Arnold H. Grossman, Anthony R. D'Augelli and Scott L. Hershberger: Social Support Networks of Lesbian Gay and Bisexual Adults 60 Years of Age and Older, *Journal of Gerontology B*, 55(3), 171-179, 2000.

Liesi E. Hebert, Robert S. Wilson, David W. Gilley, Laurel A. Beckett, Paul A. Scherr, David A. Bennett and Denis A. Evans: Decline of Language among Women and Men with Alzheimer's Disease, *Journal of Gerontology B*, 55(6), 354-361, 2000,

David A. Loewenstein, Soledad Argulles, Marina Bravo, Rhonda Q. Freeman, Trinidad Argulles, Amarilis Acevedo and Carl Eisdorfer :Caregivers' Judgments of the Functional Abilities of the Alzheimer's Disease Patient: A Comparison of Proxy, Reports and Objective Measures, *Journal of Gerontology B*, 56(2), 78-84, 2001.

百合野秀朗 (話題提供)

Ben, Harder: Stress Hormone Addles Memory, *Science*, 2001, July.

Martha Downs: How Cigarette Chemical Kills Eggs, *Science*, 2001, May.

9月25日

小林奈美 (原著抄読)

Jorg Richter and Martin R. Eisemann: Attitudinal patterns determining decision-making in severely ill elderly patients: a cross-cultural comparison between nurses from Sweden and Germany, *International Journal of Nursing Studies*, 38(4), 381-388, 2001.

Joan M, Teno, Kristen McNiff, and Joanne Lynn: Measuring Quality of Medical Care for Dying Persons and their Families: Preliminary Suggestions for Accountability, *Annual*

Review of Gerontology and Geriatrics, 20, 97-119, 2000

福田泰子 (学会発表予演会)

手荒い：質問紙調査を中心として (第42回日本母性衛生学会学術集会)

10月2日

松井典子 (原著抄読)

Audie A. Atienza, Patrick C. Henderson, Sara Wilcox and Abby C. King: Gender Differences in Cardiovascular Response to Dementia Caregiving, *The Gerontologist*, 41(4), 490-498, 2001.

深堀浩樹 (原著抄読)

John Paley, MA: Paradigms and Presuppositions: The Difference between Qualitative and Quantitative Research, *Scholarly Inquirey for Nursing Practice: An International Journal*, 14(2), 143-156, 2000.

Linda Monyeyham, DNS, RN, et al: Depressive Symptoms among African American Women with HIV Disease, *Scholarly Inquirey for Nursing Practice: An International Journal*, 14(1), 9-40, 2000.

10月16日

深堀浩樹 (原著抄読)

MP Lawton, K Van Haitsma and J Klapper : Observed affect in nursing home residents with Alzheimer's disease, *Journal of Gerontology B*, 51(1), 3-14, 1996.

涌水理恵 (原著抄読)

Ricardo Perez-Cuevas, et al.: Immunization promotion activities: are they effective in encouraging mothers to immunize their children? *Social Science & Medicine*, 49(7), 921-931, 1999.

10月23日

小林奈美 (原著抄読)

Richard Schulz, Scott R. Beach, Bonnie Lind, Lynn M. Martire, Bozena Zdaniuk, Calvin, Hirsch, Sharon Jackson and Lynda Burton: Involvement in Caregiving and Adjustment to Death of a Spouse: Findings From the Caregiver Health Effects Study, *JAMA*, 285(24), 3123-3129, 2001.

D. William Molloy, Gordon H. Guyatt, Rosalie Russo, Ron Goeree, Bernie J. O'Brien, Michel Bedard, Andy Willan, Jan Watson, Christine Patterson, Christine Harrison, Tim Standish, David Strang, Peteris J. Darzins, Stephanie Smith and Sacha Dubois: Systematic Implementation of an Advance Directive Program in Nursing Homes: A Randomized Controlled Trial, *JAMA*, 283(11), 1437-1444, 2000.

北野和代 (原著抄読/研究発表)

Olson JK: Relationships between nurse-expressed empathy, patient-perceived empathy and patient distress, *Image- the Journal of Nursing Scholarship*, 27(4), 317-22, 1995.

一般病棟看護婦とホスピス看護婦の家族に対する共感の比較（家族看護実践の具体的方法を模索するために）

10月30日

松井典子（原著抄読）

Cynthia L. Port, Ann L. Gruber-Baldini, Lynda Burton, Mona Baumgarten J., Richard Hebel, Sheryl Itkin Zimmerman and Jay Magaziner: Resident Contact With Family and Friends Following Nursing Home Admission, *The Gerontologist*, 41(5), 589-596, 2001

深堀浩樹（原著抄読）

Holtkamp CCM, Kerkstra A, Ribbe MW, van Campen C, Ooms ME: The relation between quality of co-ordination of nursing care and quality of life in Dutch nursing homes, *Journal of Advanced nursing*, 32(6), 1364-1373, 2000.

Narayan S, Lewis M, Tornatore J, Hepburn, K and Corcoran-Perry, S. Subjective responses to caregiving for a spouse with dementia, *Journal of Gerontological Nursing*, 27(3), 19-28, 2001.

Alan Peason, et al.: Skills mix in ausutraian nursing homes, *Journal of Advcanced nursing*, 17, 767-776, 1992.

11月6日

河田みどり（原著抄読）

Karin L. Osterman, RN, RM, and, Vivi-Anne Rahm, Dr Med Sc, RN, RM: Lactation Mastitis: Bacterial Cultivation of Breast Milk, Symptoms, Treatment and Outcome, *Journal of Human Lactation*, 16(4), 297-302, 2000.

涌水理恵（原著抄読）

Schanberg LE, Anthony KK, Gil KM, Lefebvre JC, Kredich DW, Macharoni LM.: Family pain history predicts child health status in children with chronic rheumatic disease. *Pediatrics*, 108(3), 61-67, 2001.

11月13日

松井典子

Louis D. Burgio, Rebecca Allen-Burge, David L. Roth, Michelle S. Bourgeois, Katinka Dijkstra, John Gerstle, Erik Jackson and Leanna Bankester : Come Talk With Me: Improving Communication Between Nursing Assistants and Nursing Home Residents During Care Routines, *The Gerontologist*, 41(4), 449-460, 2001.

11月20日

小林奈美（原著抄読）

Faith P. Hopp: Preferences for Surrogate Decision Makers Informal Communication and Advance Directives Among Community-Dwelling Elders: Results From a National Study, *The Gerontologist*, 40(4), 449-457, 2000.

David William Molloy, Rosalie Russo, David Pedlar and Michel Bedard: Implementation of Advance Directives among Community-Dwelling Veterans, *The Gerontologist*, 40(2),

213-217, 2000.

11月27日

松井典子

Sandra F. Simmons and John F. Schnelle: The Identification of Residents Capable of Accurately Describing Daily Care: Implications for evaluating Nursing Home Care Quality, *The Gerontologist*, 41(5), 605-611, 2001.

北野和代,

Marja Kaunonen, PhD, RN: The Impact of Supportive Telephone Call Intervention on Grief after the Death of a family Member, *Cancer Nursing*, 23(6), 483-491, 2000.

Susan W. Tolle, Virginia P. Tilden, Anne G. Rosenfeld, Susan E. Hickman: Family Reports of Barriers to Optimal Care of the Dying, *Nursing Research*, 49(6), 310-317, 2000.

12月4日

深堀浩樹 (原著抄読)

Kristie Long, MS, S. Sudha, PhD. and Elivabeth J. Mutran, PhD: Elder-Proxy Agreement Concerns the Functional Status and Medical History of the Older Person: The Impact of Caregiver Burden and Depressive Symptomatology, *Journal of the American Geriatrics Society*, 46(9), 1103-1111, 1998.

Jo Ann Duffy, Michael Duffy and William E. Kilbourne: A Comparative Study of Resident Family and Administrator Expectations for Service Quality in Nursing Homes, *Health Care Management Review*, 26(3), 75-85, 2001.

12月18日

杉山智子 (研究経過報告)

アルツハイマー型中期痴呆症患者のADLケアへの抵抗に関する研究

山本真梨子 (研究経過報告)

A study of actual demanding time of care for the elderly with dementia

2002年度

4月16日

小林奈美 (原著抄読)

Bergen A, While A: A case for case studies: exploring the use of case study design in community nursing research. *Journal of Advanced Nursing*, 31(4), 926-34, 2000.

Holst G, Edberg AK, Hallberg IR: Nurses' narrations and reflections about caring for patients with severe dementia as revealed in systematic clinical supervision sessions, *Journal of aging studies*, 13(1), 89-107, 1999.

深堀浩樹 (原著抄読)

Albert SM, Del Castillo-Castaneda C, Sano M, Jacobs DM, Marder K, Bell K, Bylsma F, Lafleche G, Brandt J, Albert M, Stern Y: Quality of life in patients with Alzheimer's disease as reported by patient proxies, *Journal of the American Geriatrics Society*, 44(11), 1342-1347, 1996.

Duncan MT, Morgan DL: Sharing the caring: family caregivers' views of their relationships with nursing home staff, *The Gerontologist*, 34(2), 235-244, 1994.

4月23日

池田智子 (研究発表)

Andersen's Behavioral Model

4月30日

細坂泰子 (原著抄読)

Carol Shieh, Melva Kravitz, Hsiu-Hung Wang: What do we know about maternal-fetal attachment, *Kaohsiung Journal of Medical Sciences*, 17(9), 448-454, 2001.

Charpak N, Ruiz-Pelaez JG, Figueroa de CZ, Charpak Y: A randomized controlled trial of kangaroo mother care: results of follow-up at 1 year of corrected age, *Pediatrics*, 108(5), 1072-1079, 2001.

5月7日

古田正代 (原著抄読)

Kitamura T, Watanabe K, Takara N, Hiyama K, Yasumiya R, Fujihara S: Precedents of perceived social support: personality early life experiences and gender, *Psychiatry & Clinical Neurosciences*, 56(2), 169-176, 2002.

Pasquini P, Liotti G, Mazzotti E, Fassone G, Picardi A: The Italian Group for the Study of Dissociation.: Risk factors in the early family life of patients suffering from dissociative disorders, *Acta Psychiatrica Scandinavica*, 105(2), 110-116, 2002.

5月14日

杉山智子 (原著抄読)

Ragneskog H, Gerdner LA, Hellstrom L: Integration of lucid individuals and agitated individuals with dementia in different care units, *Journal of Clinical Nursing*, 10(6), 730-736, 2001.

Norbergh K, Hellzen O, Sandman P, Asplund K: The relationship between organizational climate and the content of daily life for people with dementia living in a group-dwelling, *Journal of Clinical Nursing*, 11(2), 237-246, 2002.

松本和史 (原著抄読)

Weitzner MA, McMillan SC, Jacobsen PB: Family caregiver quality of life: differences between curative and palliative cancer treatment settings, *Journal of Pain & Symptom Management*, 17(6), 418-428, 1999.

Cameron JI, Franche RL, Cheung AM, Stewart DE: Lifestyle interference and emotional distress in family caregivers of advanced cancer patients, *Cancer*, 94(2), 521-527,

2002.

5月21日

松井典子 (原著抄読)

Chou SC, Boldy D: Patient perceived quality-of-care in hospital in the context of clinical pathways: development of an approach, *Journal of Quality in Clinical Practice*, 19(2), 89-93, 1999.

Chou SC, Boldy DP, Lee AH: Resident satisfaction and its components in residential aged care, *The Gerontologist*, 42(2), 188-198, 2002.

ベススキ (原著抄読)

Kim EJ, Buschmann MT: The effect of expressive physical touch on patients with dementia, *International Journal of Nursing Studies*, 36(3), 235-243, 1999.

Arthur D, Chan HK, Fung WY, Wong KY, Yeung KW: Therapeutic communication strategies used by Hong Kong mental health nurses with their Chinese clients, *Journal of Psychiatric & Mental Health Nursing*, 6(1), 29-36, 1999.

5月28日

深堀浩樹 (原著抄読)

Bowers BJ: Family perceptions of care in a nursing home, *The Gerontologist*, 28(3), 361-368, 1988.

Whitlatch CJ, Schur D, Noelker LS, Ejaz FK, Looman WJ: The stress process of family caregiving in institutional settings, *The Gerontologist*, 41(4), 462-473, 2001.

松井典子 (原著抄読)

Hertzberg A, Ekman SL, Axelsson K: Staff activities and behaviour are the source of many feelings: relatives' interactions and relationships with staff in nursing, *Journal of Clinical Nursing*, 10(3), 380-388 2001.

6月4日

河田みどり (原著抄読)

Foxman B, D'Arcy H, Gillespie B, Bobo JK, Schwartz K: Lactation mastitis: Occurrence and medical management among 946 breastfeeding women in the United States, *American Journal of Epidemiology*, 155(2), 103-114, 2002.

山下仁 (原著抄読)

Jordan ML, Delunas LR: Quality of life and patterns of nontraditional therapy use by patients with cancer, *Oncology Nursing Forum*, 28(7), 1107-1113, 2001.

Yeh C.: Religious beliefs and practices of Taiwanese parents of pediatric patients with cancer, *Cancer Nursing*, 24(6), 476-482, 2001.

6月11日

北野和代 (原著抄読)

O'Malley P, Favaloro R, Anderson B, Anderson ML, Siewe S, Benson-Landau M, Deane D, Feeney J, Gmeiner J, Keefer N, Mains J, Riddle K: Critical care nurse perceptions of family needs, *Heart & Lung*, 20(2), 189-201, 1991.

池田智子 (原著抄読)

Elisa J Grant-vallone, Stewart I Donaldson: Consequences of work-family conflict on employee well-being over time, *Work & Stress*, 15(3), 214-226, 2001.

6月18日

小林奈美

カルガリー大学エクスターンシップ参加報告

6月25日

松本和史 (原著抄読)

Schutta KM, Burnett CB: Factors that influence a patient's decision to participate in a phase I cancer clinical trial, *Oncology Nursing Forum*, 27(9), 1435-1438, 2000.

Cheng JD, Hitt J, Koczwara B, Schulman KA, Burnett CB, Gaskin DJ, Rowland JH, Meropol NJ: Impact of quality of life on patient expectations regarding phase I clinical trials, *Journal of Clinical Oncology*, 18(2), 421-428, 2000.

細坂泰子 (原著抄読)

Nina Koren-Karie: Mother's attachment representations and choice of infant care: Center care vs. Home, *Infant and Child Development*, 10(3), 117-127, 2001

Blaise Pierrehumbert, Raphaelle Miljkovitch, Bernard Plancherel, Olivier Halfon, Francois Ansermet: Attachment and temperament in early childhood; Implications for later behavior problems, *Infant and Child Development*, 9(1), 17-32, 2000.

7月16日

古田正代 (原著抄読)

Wendland-Carro J, Piccinini CA, Millar WS: The role of an early intervention on enhancing the quality of mother-infant interaction, *Child Development*, 70(3), 713-721, 1999.

9月10日

河田みどり (研究経過報告)

授乳期乳腺炎の感染経路と予防に関する研究

北野和代 (研究経過報告)

ターミナル期の患者とその家族への看護に関する調査研究 (仮題)

9月17日

細坂泰子 (原著抄読)

Marian J Bakrmans-Kranenburg, Femmie Jeffer, Marinus H Van Ijzendoorn: Intervention

with video feedback and attachment discussions: Does type of maternal insecurity make a difference? *Infant Mental Health Journal*, 19(2), 202-219, 1998.

深堀浩樹 (研究発表)

特別養護老人ホーム利用者家族の面会に関する研究

9月24日

松本和史 (原著抄読)

Kelly C, Ghazi F, Caldwell K: Psychological distress of cancer and clinical trial participation: a review of the literature, *European Journal of Cancer Care*, 11(1), 6-15, 2002.

北野和代 (研究経過報告)

ターミナル期の患者とその家族への看護に伴う困難な状況に対する看護師の感情と行動に関する研究 (仮題)

10月8日

細坂泰子 (研究計画発表)

博士論文研究計画

北野和代 (原著抄読)

Ludwick R, Zeller RA: The factorial survey: an experimental method to replicate real world problems, *Nursing Research*, 50(2), 129-133, 2001.

11月12日

深堀浩樹 (原著抄読)

Linda Lindsey Davis, Kathleen Buckwalter: Family caregiving after nursing home admission, *Journal of Mental Health and Aging*, 7(3), 361-379, 2001

Yamamoto-Mitani N, Aneshensel CS, Levy-Storms L: Patterns of family visiting with institutionalized elders: the case of dementia, *Journal of Gerontology B*, 57(4), 234-246, 2002.

11月19日

ベスッキ (原著抄読)

Ryu H, Young WB, Park C: Korean American health insurance and health services utilization, *Research in Nursing & Health*, 24(6), 494-505, 2001.

杉山智子 (研究発表)

痴呆性高齢者のケア抵抗について

11月26日

杉山智子 (原著抄読)

Karl-Gustaf Norbergh, Kenneth Asplund, Birgit Holitz Rassnussen, Gunnae Nordahl,

Per-Olof Sandman: How patients with dementia spend their time in a psycho-geriatric unit, *Scandinavian Journal of Caring Sciences*, 15(3), 215-221, 2001.

北野和代 (研究経過報告)

ターミナル期の患者とその家族への看護に対する看護師の感情と行動に関する研究 (仮題)

12月3日

古田正代 (原著抄読)

Long T, Johnson M: Living and coping with excessive infantile crying, *Journal of Advanced Nursing*, 34(2), 155-162, 2001.

Long T: Excessive infantile crying: a review of the literature, *Journal of Child Health Care*, 5(3), 111-116, 2001.

松本和史 (研究経過報告)

第一相試験を受ける (悪性腫瘍の) 患者の経験について、看護職の役割について

12月10日

杉山智子 (原著抄読)

Caris-Verhallen WMC, Kerkstra A, Bensing JM: Non-verbal behaviour in nurse-elderly patient communication, *Journal of Advanced Nursing*, 29(4), 808-818, 1999.

ペスッキ (研究経過報告)

The Determinants of Health Insurance Coverage among a Korean Christian Church in Tokyo.

12月17日

山下仁 (原著抄読)

Hrobjartsson A, Gotzsche PC: Is the placebo powerless? An analysis of clinical trials comparing placebo with no treatment, *New England Journal of Medicine*, 344(21), 1594-1602, 2001.

杉浦仁美 (卒業論文中間報告)

携帯電話と友達関係に関するアンケート

深堀浩樹 (研究経過報告)

都内特別養護老人ホーム利用者家族の面会に関する研究

3月4日

松本和史 (原著抄読)

Cox K: Assessing the quality of life of patients in phase I and II anti-cancer drug trials: interviews versus questionnaires, *Social Science & Medicine*, 56(5), 921-934, 2003.

古田正代（研究計画報告）

乳児の啼泣と母親のメンタルヘルスに関する研究

3月11日

池田智子（研究計画）

中小企業労働者の職業性ストレス

古田正代（原著抄読）

Keefe MR, Kotzer AM, Froese-Fretz A, Curtin M: A longitudinal comparison of irritable and nonirritable infants, *Nursing Research*, 45(1), 4-9, 1996.

4. 家族看護学教室研究会

第1回 2002年4月26日

森那美子（国立国際医療センター研究所，感染・熱帯病感染部，当教室客員研究員）
「学位論文の審査，および最近の研究について」

第2回 2002年5月24日

渡邊久美（岡山大学医学部保健学科助手，当教室内地研究員）
「日本民族の精神性」

第3回 2002年6月28日

斎加志津子（千葉県衛生研究所疫学調査研究室，当教室研究生）「ムンプスウイルスの神経原性評価系について」

第4回 2002年7月26日

山下仁（筑波技術短期大学附属診療所助手，当教室客員研究員）「博士論文の申請：ケースレポート」

第5回 2002年9月27日

河原宣子氏（三重県立看護大学講師，当教室客員研究員）
「高齢・過疎地域における家族看護．三重県紀南地域における高齢者実態調査と訪問看護師の活動を通して．」

第6回 2002年10月25日

本間郁子氏（特養ホームを良くする市民の会代表 NPO 法人介護施設サポートセンター理事長，さわやか福祉財団地域推進委員）
「特別養護老人ホームの第三者評価組織について」

第7回 2002年11月25日

山本精一郎氏（国立がんセンターがん情報研究部研究員）
「大規模コホート研究の計画・実施・結果．大豆と乳がんの関係を例に，厚生労働省多目的コホート研究の経験を通じて．」

第8回 2003年1月24日

小林奈美氏（当教室助手）
「日本における家族システム看護論の実践・研究の試み」

第9回 2003年2月28日

河田みどり氏（当教室大学院生博士課程）
「博士課程における研究の進め方について」.

第10回 2003年3月11日

松井典子氏（当教室助手）
「痴呆性高齢者の予後追跡調査」

特別講演 2002年9月10日

山本則子氏（米国カルフォルニア大学ロスアンゼルス校看護学部，前東京大学医学
部家族看護学教室講師）
「Nurse Practitioner and Advanced Practice Nursing」

5. 教室の沿革

- 2001.4.1 常勤スタッフは教授1(杉下知子), 助手1(小林奈美), 技術官1(秋山照男)の計3名, 非常勤講師6(高橋真里先生, 須貝佑一先生, 渡辺祐子先生, 田中哲郎先生, 鳥居央子先生, 法橋尚宏先生) 大学院博士課程5(森那美子, 工藤祐子, 河田みどり, 松井典子, 池田智子) 修士課程6(杉山智子, 福田泰子, 北野和代, 深堀浩樹, ベスッキ, 涌水理恵), 客員研究員10(手塚圭子, 大谷尚子, 河原宣子, 西岡光世, 大嶺ふじ子, 山下仁, 内藤直子, 林邦彦, 森那美子, 日下修一), 研究生3(大脇万起子, 百合野秀朗, 矢野ひろみ), 卒論生1(山本真理子).
- 2001.7.1 松井典子氏(前東京大学大学院医学系研究科家族看護学分野博士課程大学院生)が本教室の助手として発令される. 常勤スタッフは教授1(杉下知子), 助手2(小林奈美, 松井典子), 技術官1(秋山照男)の計4名となる.
- 2001.7.16. 事務補佐員として, 植木智子氏を迎える(～2002.3.31).
- 2001.12.13 東京大学大学院医学系研究科健康科学・看護学専攻とソウル大学校看護大学との間における第3回学術交流集会「Joint, International, Conference, Tokyo, University, Oita, University, &, S.N.U, on, Evidence-based, Nursing, Research」を韓国ソウル大学校看護学部にて共催. 松井典子助手, Invited, speakerとして発表(～2001.12.14).
- 2002.4.1 上別府圭子氏(前日本橋学館大学人文経営学部助教授)が本教室の助教授として発令され, 君塚昭子氏を事務補佐員として迎える. 常勤スタッフは教授1(杉下知子), 助教授1(上別府圭子), 助手2(小林奈美, 松井典子), 技術官1(秋山照男)の計5名となる. 非常勤講師6(高橋真里先生, 須貝佑一先生, 渡辺裕子先生, 田中哲郎先生, 鳥居央子先生, 法橋尚宏先生) 大学院博士課程4(河田みどり, 池田智子, 杉山智子, 細坂(旧姓福田)泰子) 修士課程6(北野和代, 深堀浩樹, ベスッキ, 涌水理恵(休学), 古田正代, 松本和史), 客員研究員10(手塚圭子, 大谷尚子, 河原宣子, 西岡光世, 大嶺ふじ子, 山下仁, 内藤直子, 林邦彦, 森那美子, 日下修一, 剣物祐子), 研究生4(大脇万起子, 浅香知子, 熊井秋穂, 斎加志津子), 卒論生1(杉浦仁美).
- 2002.4.26 森那美子氏(国立国際医療センター研究所, 感染・熱帯病感染部, 当教室客員研究員)を迎え, 第1回家族看護学教室研究会を開催. 講演内容「学位論文の審査, および最近の研究について」.
- 2002.5.6 小林奈美助手カルガリー大学看護学部家族看護ユニット主催の家族看護エクスターンシップに参加(～2002.5.10).
- 2002.5.24 渡邊久美氏(岡山大学医学部保健学科助手, 当教室内地研究員)を迎え, 第2回家族看護学教室研究会を開催. 講演内容「日本民族の精神性」.

- 2002.6.28 齋加志津子氏（千葉県衛生研究所疫学調査研究室，当教室研究生）を迎え，第3回家族看護学教室研究会を開催．講演内容「ムンプスウイルスの神経原性評価系について」。
- 2002.7.26 山下仁氏（筑波技術短期大学附属診療所助手，当教室客員研究員）を迎え，第4回家族看護学教室研究会を開催．講演内容「博士論文の申請：ケースレポート」。
- 2002.8.1 事務補佐員として，再び植木智子氏を迎える。
- 2002.9.10 山本則子氏（米国カルフォルニア大学ロスアンゼルス校看護学部，前東京大学医学部家族看護学教室講師）を迎え，特別講演を開催．講演内容は「Nurse Practitioner and Advanced Practice Nursing」。
- 2002.9.27 河原宣子氏（三重県立看護大学講師，当教室客員研究員）を迎え，第5回家族看護学教室研究会を開催．講演内容「高齢・過疎地域における家族看護．三重県紀南地域における高齢者実態調査と訪問看護師の活動を通して．」。
- 2002.10.25 本間郁子氏（特養ホームを良くする市民の会代表 NPO 法人介護施設サポートセンター理事長，さわやか福祉財団地域推進委員）を迎え，第6回家族看護学教室研究会を開催．講演内容「特別養護老人ホームの第三者評価組織について」。
- 2002.10.30 小林奈美助手カルガリー大学看護学部家族看護ユニット主催の家族看護エクスターンシップ，(Level, 2)，に参加（～2002.11.1）。
- 2002.11.22 家族看護学教室，学部・大学院教育まとめの会を東京大学本郷キャンパス内山上会館にて開催。
- 2002.11.25 山本精一郎氏（国立がんセンターがん情報研究部研究員）を迎え，第7回家族看護学教室研究会を開催．講演内容「大規模コホート研究の計画・実施・結果．大豆と乳がんの関係を例に，厚生労働省多目的コホート研究の経験を通じて．」。
- 2002.12.19 第4回家族看護ワークショップ「Illness, Belief, Model, for, Advanced, Practice」を東京大学医学部3号館 S102にて共催．，Lorraine.M.Wright 博士（カナダカルガリー大学看護学部教授）を講師として迎える（会長：杉下知子教授）。
- 2003.1.24 小林奈美氏（当教室助手）を講師として，第8回家族看護学教室研究会を開催．講演内容「日本における家族システム看護論の実践・研究の試み」。
- 2003.2.28 河田みどり氏（当教室大学院生博士課程）を講師として，第9回家族看護学教室研究会を開催．講演内容「博士課程における研究の進め方につ

いて」.

- 2003.2.20-21 平成 14 年度東京大学学術研究奨励資金による平成 14 年度東大シンポジウム「看護学の新展開、情報学とのドッキング。」を東京大学大学院医学系研究科教育研究棟内鉄門記念講堂にて主催（委員長：杉下知子教授）.
- 2003.3.7 杉下知子教授最終講義「家族看護学への道」。講義終了後，退官記念会を東京大学山上会館にて開催.
- 2003.3.14 松井典子氏（当教室助手）を講師として，第 10 回家族看護学教室研究会を開催。講演内容「痴呆性高齢者の予後追跡調査」.
- 2003.3.31 杉下知子教授退官.

6. 資料（卒論・修論・博論要旨）

卒業論文内容要旨

論文題目

Measurement of time required for bathing-related care of the elderly with dementia:
A pilot study in a nursing home in Japan

指導教官：小林奈美助手、杉下知子教授

東京大学医学部健康科学・看護学科

平成 12 年度進学

山本真梨子

[Introduction] It is said that the evaluation of nursing care requirements is affected by patients' mobility and that the nursing care required by the elderly with high mobility and with dementia tends to be underestimated. The care of persons with dementia is particularly time-consuming.

[Purpose] 1) To clarify the time required for bathing-related care for the elderly with dementia and mobility impaired to different degrees. 2) To clarify how "guiding" and "guarding" behaviors affect fluctuations in and durations of required care time.

[Subjects & Methods] The subjects of this study were eight residents living in a special care unit (SCU) for the elderly with severe dementia. They had no severe diseases except severe dementia and all had long-term care insurance. Their mobility varied from being bed-bound to being confined to a chair or to being able to walk. We collected five types of data as indices of their condition and status: social environment (the number of residents and the number of staff members for bathing and dressing), physical environment (temperature, and humidity), care giving (the number of staff assigned to them and how they were guided to the bathroom), medical treatment, and individual status (mobility, and incidents occurring in this study period). We selected three care-related tasks (guiding to the bathroom, undressing, and dressing) and measured the time required to provide bathing care. First, certain data were plotted on line graphs and examined for the presence of circumstances that might affect study outcomes. Second, the eight subjects were divided into two groups: a high mobility (walking) group (HMG) and a low mobility (bed-bound or chair-bound) group (LMG). We calculated the median of data on the three tasks (time spent per meter en route to the bathroom, time spent undressing, and time spent dressing) and plotted them by group to detect any difference between the two groups. Third, in each case we calculated as follows:

$$Y_n(t) = X_n(t) - \text{med}(n) \quad 1 \leq n \leq 8, 1 \leq t \leq 8$$

$$R_n(t) = Y_n(t) / Y_{n\max} \quad 0 \leq |R_n(t)| \leq 1$$

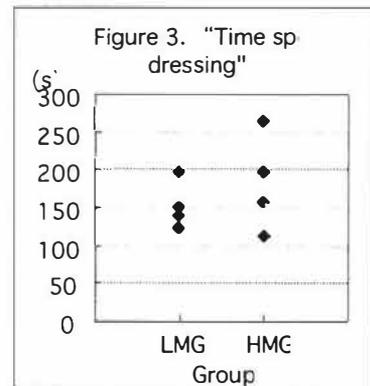
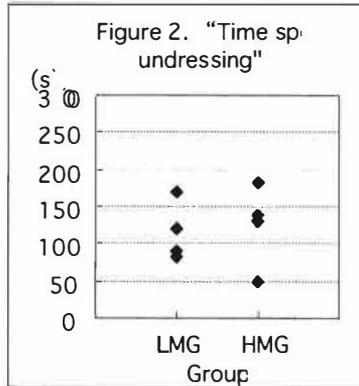
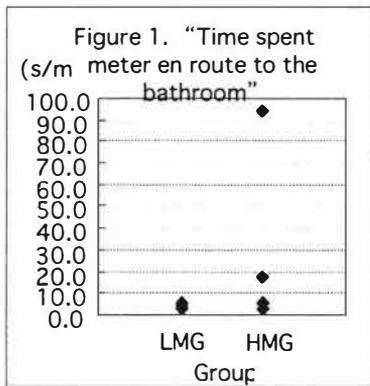
where $X_n(t)$: the Case(n)'s t-th observations; $\text{med}(n)$: the median for Case(n); $Y_n(t)$: the deviation of $X_n(t)$ from $\text{med}(n)$; $Y_{n\max}$: the maximum of $Y_n(t)$; $R_n(t)$: the ratio of $Y_n(t)$ to $Y_{n\max}$; $B(0.8)$: the frequency of an $R_n(t)$ greater than 0.8.

We analyzed the following cases to find what happened in cases where $Y_{\max} \geq 60(\text{s/m})$ ("guiding to the bathroom") and $Y_{\max} \geq 180(\text{s})$ ("undressing" and "dressing").

[Results] There were no unusual circumstances affecting outcomes during the study period.

Figures 1, 2, and 3 show that care time requirements differed little among subjects, but the range of the median was larger in the HMG than in the LMG. Table 1 shows that the magnitude of care required by these tasks (Y max) was large in seven cases. But the fluctuation (B (0.8)) was low. Analysis of described data of the seven cases' situation indicates that a lack of "guiding" and "guarding" greatly increased care time requirements.

[Discussion and Conclusion] Our findings indicate that high mobility people do not necessarily require less care time than low mobility people and how guiding and guarding were performed significantly affected the incidence of unusual circumstances, and despite the relatively low frequency of these events, they vastly prolonged care time. One of the limits of this study is the small sample size, making it difficult to generalize the results to all nursing home residents, but given the lack of quantitative research on this topic, these results shed valuable light on an understudied area. Future studies are needed to develop methods of observation taking "guiding" and "guarding" into consideration and to accumulate data.



Figures 1, 2, 3. Comparison between HMG and LMG of median of time required for each category of bathing-related care

Table 1. The fluctuation and magnitude of bathing-related care

ID	GROUP	Guiding to the bathroom				Undressing				Dressing			
		N	med	Ymax	B (0.8)	N	med	Ymax	B (0.8)	N	med	Ymax	B (0.8)
Case 1	LMG	4	3.05	12.65	1/4	3	90	31	1/3	4	198	44	1/4
Case 2	LMG	5	3.8	0.7	2/5	7	81	255	1/7	7	150	92	2/7
Case 3	LMG	5	5	32.1	1/5	6	169	139	1/6	8	140	100	1/8
Case 4	LMG	4	5.9	108.4	1/4	6	119.5	202.5	2/6	8	124	44	3/8
Case 5	HMG	6	2.5	2.9	1/6	7	131	76	4/7	8	266.5	324.5	1/8
Case 6	HMG	4	94.1	152.3	1/4	5	139	73	2/5	5	158	136	1/5
Case 7	HMG	6	5.9	35.5	1/6	7	49	208	1/7	6	197.5	93.5	1/6
Case 8	HMG	6	18.2	104.5	2/6	7	183	165	1/7	6	112.5	104.5	1/6

N: Number of observations

06034 杉山 智子

Tomoko Sugiyama

指導教官：杉下 知子 教授

Tutor : Prof.C. Sugishita

健康科学・看護学専攻 平成 12 年 4 月入学

Admission to School of Health Sciences and Nursing in April, 2000

緒言

平成 12 年の国勢調査によれば、老年人口は 2227 万人に達し、総人口の 17.9%を占めており、それに伴い痴呆性高齢者の割合も増加していくことが予測されている。従来、痴呆性高齢者への対処は中核症状に焦点を当てた薬物療法が中心であったが、顕著な効果が得られていない。家庭および施設・病院における介護実践では、中核症状よりも周辺症状による身体的・精神的負担が大きいとされている。従って、介護職による周辺症状への対処の確立は今後の大きな課題となるが、従来の痴呆ケアは経験に基づく介護実践が主流であり、evidence に基づくケアの評価法が確立していないのが現状である。

そこで、本研究では老人病院痴呆ケア病棟入院中のアルツハイマー型中期痴呆症患者を対象とし、周辺症状の 1 つである Activities of Daily Living (以下、ADL とする) ケアへの抵抗に注目し、ADL ケア抵抗時のスタッフによるケアと患者の反応を観察することにより望ましいケアについて探索することとした。

方法

1. 対象

本研究の対象は全 300 床の老人病院内の、痴呆ケア病棟・閉鎖型の介護力強化病棟に入院中のアルツハイマー型痴呆症中期かつ自立歩行が可能な対象患者 7 名 (男性 1 名, 女性 6 名) および病棟スタッフ 20 名 (看護職 8 名, 介護職 12 名) であり、平成 13 年 8 月 1 日から 11 月 12 日まで観察法を実施した。

2. 方法

本研究では同一調査者 1 名によって日勤帯連続 8 時間、土日を除く連続平日 5 日間で 1 人の観察対象患者に対しそれぞれ 40 時間、全対象者に対して観察を実施し、観察記録より ADL ケア (排泄、身支度、入浴、食事) の実施場面を抽出した。分析対象は観察した全ての ADL ケア場面のうち ADL ケアへの抵抗がみられた場面のみとし、各場面を最終的な ADL ケアの達成状況と患者の表情 (笑顔の有無) で 4 パターンに分類した。すなわち ADL ケアが達成した場面のうち、最終的に患者が喜びの表情になった時を「満足できたケア」、患者の表情は喜び以外の時を「満足できなかったケア」とした。また、目的のケアが達成できず、患者の表情は喜び以外の時「中断したケア」とした。

結果

1. 実施したすべての ADL ケアへのうち抵抗がみられた割合

観察された全 323 場面のうち抵抗が見られたのは 90 場面 (27.9%) であり、その内訳は「排

泄」36場面、「身支度」23場面、「入浴」12場面、「食事」19場面であった。また、「排泄」では、「中断したケア」(15場面)、「身支度」では「満足できたケア」(12場面)、「入浴」では「満足できたケア」(7場面)、「食事」は「満足できなかったケア」(13場面)が最も多かった。

2. パターン別にみたスタッフ人数及びケア所要時間

各場面でかかわったスタッフ数は 1.78 ± 0.96 人であった。「排泄」、「身支度」、「食事」でのスタッフ人数は「満足できたケア」で最も多かったが、「入浴」では「満足できたケア」が最も少なかった。各場面のケア総所要時間は 104.3 ± 94.1 秒であり、どのADLケアにおいても「満足できたケア」のケア総所要時間およびスタッフ1人当たりのケア所要時間はいずれのADLケアでも「満足できたケア」が最も長かった。

3. 各ADLケアにおけるスタッフの声かけ(ケアの説明・日常会話)

ケアの説明は、「排泄」29/36場面、「身支度」11/12場面、「食事」18/19場面で実施されており、説明の有無と各パターンの頻度との関連はみられなかった。一方、日常会話は、「排泄」7/36場面、「身支度」8/23場面、「入浴」7/12場面、「食事」5/19場面であり、いずれもケアの説明の実施より頻度が低かった。「排泄」、「身支度」、「入浴」では日常会話の有無と各パターンの頻度との間に有意な関連が見られた ($p < 0.005$)。

4. 「排泄」、「身支度」における「満足できたケア」と「満足できなかったケア」のプロセスの比較

本研究ではADLケア実施時に抵抗を起こしているため、抵抗が生じた後のみを分析対象とし、1. 抵抗時、2. 誘導時、3. ケア実施時の3プロセスに分けて分析した。

1) 排泄

抵抗時に、「満足できたケア」では対等なかかわりや提案や「日常会話」などの意識転換の声かけのいずれかが、すべての場面でみられたが、「満足できなかったケア」ではほとんどみられなかった。また誘導時にみられる「手を差し出す」誘導が、「満足できたケア」では「日常会話」をしながら相手のペースに合わせたものであったが、「満足できなかったケア」では強引であった。ケア実施時では、「満足できたケア」で「見守り」が行われていたが「満足できなかったケア」では「放置」がみられた。

2) 身支度

「満足できたケア」では抵抗時・誘導時・ケア実施時におけるかかわりの内容は「排泄」の場合と同様であった。さらに抵抗時において、「着替えを見せる」という「直接的なケアの説明」というかかわりがみられた。「満足できなかったケア」では抵抗時・誘導時・ケア実施時におけるかかわりの内容は「排泄」の場合と同様であった。

考察

「満足できたケア」は1. 抵抗時 2. 誘導時 3. ケア実施時の3つのプロセスに分けられるが、最も重要なのは抵抗時のかかわりであった。本研究はケア実践が困難な場面についてADLケア別の検討を始めて試みたものであり、このような個々のプロセスを詳細に検討することで望ましいケアの評価法を開発し、痴呆ケアの質の向上が可能となることが期待される。

黄色ブドウ球菌伝播と医療従事者清潔行動の把握

Transmission of *Staphylococcus aureus* to newborn and hand hygiene of health-care personnel in a general hospital maternity ward in Tokyo

06035 福田 泰子

Yasuko Fukuta

指導教官: 杉下 知子 教授

Tutor: Prof. C. Sugishita

健康科学・看護学専攻平成 12 年 4 月入学

Admission to School of Health Sciences

and Nursing in April, 2000

緒言

母体内において無菌状態で成長した胎児は、出生と同時に多くの細菌にさらされ、常在細菌叢を獲得する。常在細菌叢を確立する前に、院内感染等で細菌性新生児感染症の起炎菌である黄色ブドウ球菌、特に MRSA (methicillin-resistant *Staphylococcus aureus*) が感染すると、正常な常在細菌叢の均衡を崩し、MRSA を起炎菌とした新生児細菌感染症が起こりうる。従って常在細菌叢を確立していない 1 ヶ月未満の新生児に対する MRSA 感染予防は、今後临床上重要な課題となることが予想される。これまで臨床では、医療従事者による感染の媒介を防止する観点に焦点があてられており、新生児ケア実施前後での手洗いの徹底が推奨されているが、正常新生児やその母親での MRSA 保有率が低いことから、依然として母子の接触による感染に対する対策はとられていない。そこで本研究の目的は総合病院産科病棟において、新生児感染症の主な病原菌である黄色ブドウ球菌のうち、特に治療が困難となる MRSA の伝播について検討することとした。また詳細に母子間の伝播を探索するために、より保有率の高い MSSA (methicillin-sensitive *Staphylococcus aureus*) も併せて検討することとした。さらに院内感染予防の観点から、新生児ケアに関わる看護職の清潔行動を把握することで新生児への院内感染対策の問題点を考察することを目的とした。

方法

1. 対象

調査は東京都内 S 総合病院(病床数 398 床)の産婦人科外来・病棟、及び小児科外来で実施した。産婦人科病棟の常勤医療従事者は医師 4 名・助産婦 9 名・看護婦 14 名であり、産科病棟は休日夜間を除いて母子同室制である。対象は妊婦外来受診時に研究の説明を受け、書面で同意を得られた妊婦 60 名のうち、正期産で、新生児が新生児集中治療室に転院せず、分娩入院後に実際に検体を採取できた母子 55 組(91.7%)とした。同様に、研究の参加に同意を得られた医療従事者 27 名(医師 4 名・助産婦 9 名・看護婦 14 名)、および病棟環境 20 ヲ所を本研究の対象とした。

2. 細菌調査

細菌調査は平成 12 年 11 月 1 日から平成 13 年 4 月 17 日に実施した。母子は入院時・退院時・1 ヶ月健診時に、医療従事者および病棟環境は週 1 回連続 19 週にわたり検体を採取した。細菌分離は MEC 寒天培地と羊血液寒天培地を用い、細菌同定はグラム染色・コアグラールゼ凝集反応・

MRSA スクリーン・パルスフィールド電気泳動 (pulsed-field gel electrophoresis; PFGE) による DNA バンドパターンで行った。

3. 清潔行動に関する質問紙調査・観察法

新生児ケアに直接関わる産科病棟看護職の清潔行動(手洗い・手指消毒)を把握するために、対象病院産婦人科病棟の全ての看護職 23 名を対象に、自記式質問紙調査を実施した。調査項目は属性の他、清潔行動に必要な知識や看護場面別手洗い推定時間とした。また、医療従事者の清潔行動を把握するために観察法を実施した。質問紙調査を実施した看護職のうち平成 13 年 7 月における連続 4 日間の日勤帯(8:00~16:30)に、新生児室担当であった各日 1 名、計 4 名(助産婦 3 名・看護婦 1 名)を対象にビデオ撮影により、看護ケアの実践と清潔行動を観察した。

結果

1. MRSA の保有および伝播状況

本研究で得られた計 1,490 検体から分離した細菌は 2,205 株であり、うちブドウ球菌は 1,827 株であった。このうち MRSA は 8 株で、新生児:分娩時 0 株・退院時 0 株・1 ヶ月健診時 1 名 1 株 (1.8%), 母親:入院時 0 株・退院時 0 株・1 ヶ月健診時 0 株, 医療従事者 4 名 4 株 (14.8%), 病棟環境 3ヶ所 3 株 (15.0%) であった。また MRSA 8 株に対して PFGE を行なったところ、「新生児と授乳室スリッパ」「3 名の助産婦とナースステーションの床、及びナースステーション内手洗い場蛇口」から検出された MRSA が同一のバンドパターンであった。

2. 母子における MSSA の保有および伝播状況

母子間における伝播状況を把握するために、母子の MSSA 保有状況を調査した。新生児から分離した MSSA 70 株延べ 30 名のうち調査期間中に重複して検出されたものを除いた新生児は 23 名で、分娩時 0 名・退院時 11 名 (24.4%)・1 ヶ月健診時 19 名 (40.4%) であった。同様に母親から分離した 75 株延べ 50 名のうち調査期間中に重複して検出されたものを除いた母親は 26 名で、内訳は入院時 12 名 (30.0%)・退院時 16 名 (34.0%)・1 ヶ月健診時 22 名 (45.8%) であった。MSSA 陽性新生児 23 名のうち、母親も MSSA が検出され、母子ともに MSSA が陽性だった母子は 16 組であった。この母子では母子伝播の可能性が高いと考えられたため、その母子 16 組から検出された合計 50 株に PEGE を実施した結果、12 組 (44 株) が同一のバンドパターンを示した。

3. 看護職の清潔行動

質問紙調査から各看護場面前後の手洗い推定時間が、米国疾病管理センター基準を参考にした手洗い理想時間 20 秒以上に該当した割合は、新生児室入室前 (87.5%)、新生児ケア前 (80.0%)、新生児ケア後 (80.0%)、分娩介助後 (80.0%) の順で高かった。また観察法では、各看護職が実施した全ての場面の平均手洗い実測時間は 17.8 秒 (範囲 5.3-27.6 秒) であり、質問紙調査による平均知識時間 45.0 秒 (範囲 30-60 秒)・平均推定時間 38.8 秒 (範囲 15-90 秒) との間に乖離がみられた。さらに新生児担当看護婦の平均有効速乾式手指消毒実施率は 3.3% (範囲 0-8%)、平均有効手洗い実施率 27.8% (範囲 0-65%)、平均清潔行動実施率 76.8% (範囲 59-91%) であった。

考察

今回の結果から MSSA 伝播は母子間で多くみられた。MRSA と MSSA の伝播様態が同様であると仮定すると、母親が病原菌を保有すれば、母子間では病原菌も高率で伝播する可能性がある。新生児の MRSA 感染予防には、先行研究同様、医療従事者への定期的な検査・治療及び正確な手洗いによる院内感染の予防だけでなく、今後母子間の感染も考慮する必要性が示唆された。

卒業論文内容要旨

論文題目：携帯電話が中学生の 心理・友人関係に与える影響

指導教官：上別府 圭子

東京大学医学部健康科学・看護学科
平成 13 年度進学
杉浦 仁美

携帯電話が普及し、所持の低年齢化が進んでいる。しかし、小・中学生における携帯使用の実態はこれまであまり調査されていない。そこで、中学生の携帯使用の実態、中学生の携帯を使ったコミュニケーションや友人関係、中学生の携帯に対する感情や意見の傾向を明らかにすることを目的として研究を行った。

方法

都内及び近郊の県の中学校 5 校の 2 年生 651 人を対象とし、無記名自記式調査票による調査を 2002 年 12 月上旬から中旬にかけて行った。使用した調査票は、基礎情報、携帯を持っているか、携帯を持つ理由や使用頻度、メールを用いることによるコミュニケーションや友人関係の変化、携帯を持ったことによる心理の変化、携帯を持ったことによる生活の変化といった携帯を持っている人への質問、及び携帯を持ちたいと思うか、またその理由、メールを用いることによるコミュニケーションと人間関係の変化、携帯を持ったことによる心理の変化、携帯を持ったことによる生活の変化を「携帯を持ったと仮定して予想し」て答える携帯を持っていない人への質問で構成し、2 回のプレテストを経て作成した。結果の解析は SPSS 10.0Ver. for Windows を用いて行った。

結果

有効回答者 579 人(88.9%)のうち、携帯を持っている人は 286 人(49.4%)、携帯を持っていない人は 293 人(50.6%)であった。携帯を持っている人たちは、通話は外出時(156 人(56.5%))に家族(154 人(55.0%))に対してどうしても伝えなければならない用件を伝える(164 人(57.7%))ために利用し、メールは自宅で(200 人(73.8%))比較的近くにいる友人(235 人(85.5%))に対していわゆるおしゃべりをするため(211 人(75.9%))に利用している。携帯を持っていない人たちのうち、その 201 人(70.0%)が携帯を持ちたいと思っており、携帯を持ったならば、電話は比較的近くにいる友人(131 人(46.8%))とどうしても伝えなければならない用件を伝えるため(121 人(43.1%))にかけ、メールは比較的近くにいる友人(188 人(67.9%))といわゆるおしゃべりをするため(173 人(62.0%))と、持っている人と同様の使い方をするだろうと予想しているということがわかった。中学生の携帯を使ったコミュニケーションと友人との関係に関しては、携帯を持っている人、携帯を持っていない人でも持ちたいと思っている人の大部分は、携帯はコミュニケーションを良好にするものであると思っており、心理的にも安心感を得られるなどよい面を考え、人間関係を良好にできるものと感じているということがわかった。中学生の携帯に対する感情や意見の傾向は、携帯を持っている人の約 8 割は携帯のヘビーユーザー、メール中心のグループで占められており、先ほど述べたものと同様の、携帯に関してよい感情や意見を持つ傾向が高く、携帯に依存している状況にある人もいた。一方で、メールを送った後で後悔したり、内容を誤解されるといったトラブルも経験している。さらに携帯を持つことによって生活に変化があったと答える人も多くいた。携帯を持っていない人においては、ぜひ持ちたいと思っている、あった方がよいと思っている人でほぼ占められ、携帯に対しては否定的な意見はみられず、肯定的な感情や意見が目立つ傾向にあるということがわかった。

考察

近年は、社会の変化もあり、子どもたちが携帯を持ち易くなっている。また、携帯を持つことによって生活が変化したという結果が示しているように、携帯の普及が社会を変化させている側面もあると考えられた。携帯の使用者の半数はメールのヘビーユーザーであり、携帯に依存している状況が明らかになった。自宅にいるときに友人と「おしゃべり」をするためにメールを使用するという実態であったが、思いついたら即メールで「おしゃべり」をすることは友人関係上のトラブルを引き起こす一因になっている。メールのみによるコミュニケーションは実際の生のコミュニケーションとは質が違い、メールにコミュニケーションを依存することには問題がある。彼らに携帯の使用を禁止するのではなく、中学生が携帯を必要としていることを認めた上で、もっと生のコミュニケーションができるような働きかけが必要なのではないだろうか。私たちは、携帯がコミュニケーションや友人関係に与える影響について学校や家庭に伝え、中学生の携帯の使い方について考えるきっかけを提供する必要がある。また中学生に対して、携帯でのコミュニケーションによって生じる後悔やトラブルを防ぐために、どのように携帯を使えばよいか考える機会を与えられるような教育が必要と考えた。

都内特別養護老人ホーム利用者家族の面会に関する研究
Family visiting with residents of special nursing homes for the aged in Tokyo

96027 深堀 浩樹

Hiroki Fukahori

指導教官： 杉下 知子 教授

Tutor : Prof. C.Sugishita

健康科学・看護学専攻平成11年4月入学

Admission to School of Health Science

and Nursing in April, 1999

緒言

高齢化の進展とともに重度の障害を持った高齢者の増加が考えられる我が国では、在宅での生活が困難となった高齢者およびその家族の施設サービスに対するニーズは高まっていくと考えられる。施設生活が高齢者の精神的な健康状態やQOLに否定的な影響を及ぼす可能性が指摘されており、施設においては高齢者のQOLの維持に特に留意しなければならない。一方、先行研究において、家族や友人との交流が多い高齢者ほど生活満足度や精神的な健康、QOLが高いなどの結果が報告されており、施設内の高齢者への家族や友人の交流(面会など)が継続されるよう援助することで、高齢者の施設生活におけるQOLの向上につながる事が期待される。これまで、施設内の高齢者への家族による面会の頻度や時間に影響する因子として「施設と家族の居住地との距離」や「高齢者と家族の続柄」などが明らかにされている。しかし、「痴呆疾患の有無」など我が国においては明らかになっていない因子も存在し検討を要する。そこで今回、都内特別養護老人ホーム三施設の利用者の家族を対象に、利用者への家族による面会の実態を明らかにするとともに、面会頻度および面会時間の関連因子を探索することを目的に研究を行った。

方法

1. 対象と方法

東京都内の、同一社会福祉法人により同敷地内で運営されている特別養護老人ホーム三施設の利用者の家族(以下、利用者家族とする)570名を対象とした無記名自記式調査票による郵送調査を2002年11～12月に行った。往復はがきにて同意が得られた401名に調査票を郵送し、299名から有効回答を得た(有効回収率52.5%)。なお、本研究では利用者家族を「現在特別養護老人ホームで緊急時の連絡先として登録されている世帯の世帯員のうち、利用者にもっとも多く面会しているもの」と操作的に定義した。

2. 調査項目

利用者家族・施設職員に対する面接調査および先行研究を参考に作成し、以下のように整理した。「」内に調査項目名を示す。なお、4件法で回答を得た項目はそれぞれ1点から4点を配点し分析に用いたため、以下()内に4点を配点した選択肢を示す。

- 1) 面会に関する項目：「面会頻度」および「面会時間」は得た回答を5段階の順序尺度に変換して用いた。「利用者に対する面会の理由」は10項目を設定し4件法で回答を得た(4=とてもあてはまる)。
- 2) 利用者に関する項目：属性として利用者の「性別」「年齢」「要介護度」を質問した。「施設利用期間」は得た回答を5段階の順序尺度に変換して用いた。「認知機能の低下」は利用者が家族の面会を覚えているかを質問し4件法にて回答を得た(4=全く覚えていないと思う)。
- 3) 利用者家族に関する項目：属性として利用者家族の「性別」「年齢」「配偶者の有無」「職業の有無」を質問した。「主観的健康感」「経済状態」「施設利用に関する抵抗感」は4件法にて回答を得た(4=とても良い,とても安定している,とても嫌だと感じていた)。「ソーシャルサポート」は先行研究を参考に4項目からなる尺度を作成して用いた(range 0-12, $\alpha=0.85$)。
- 4) 利用者と利用者家族の関係に関する項目：「続柄」は自由記載とし調査票の回収後コード化した(表参照)。「施設と家族自宅間の距離(所要時間)」は5段階の順序尺度に変換して用いた。「利用者への介護経験」「施設利用前の利用者との関係」は4件法で回答を得た(4=よくしていた,とても良かった)。

3. 分析方法

面会頻度と面会時間に関連する因子の検討のため、両者を目的変数とした重回帰分析を行った。変数選択法には自由度調整済み決定係数を最大にする総当り法を用いた。統計解析には、統計パッケージ Windows 版 SAS(Ver.8e)を用い、有意水準は5%とした。

結果

1. 分析対象者の特性

利用者家族の性別は女性 188 名(62.9%)、平均年齢は 61.5±9.9 歳、利用者との続柄は配偶者 39 名(13.0%)、子164名(54.9%)、子の配偶者41名(13.7%)、きょうだい 18 名(6.0%)、その他 37 名(12.4%)であった。利用者の性別は女性 245 名(81.9%)、平均年齢は 84.6±8.0 歳、要介護度は 4 の人が 98 名(32.8%)と最も多かった。分析対象となった利用者の性別・年齢・要介護度は、わが国の特別養護老人ホームの利用者と比較し、大きく乖離してはなかった。

2. 面会頻度・面会時間の回答分布

利用者家族 299 名のうち、185 名(61.8%)が週 1 回以上、また 233 名(77.9%)が一回あたり 60 分以上面会に行っていた。

3. 利用者に対する面会の理由

面会の理由のうち多くの利用者家族が「あてはまる」と回答していたのは、「利用者との会話」(89.6%)、「利用者の様子の把握」(96.3%)、「利用者に会いたいという欲求」(91.4%)であった。

4. 面会頻度・面会時間の関連因子(表)

面会頻度の関連因子として利用者の「年齢」「施設利用期間」「要介護度」「認知機能の低下」および利用者家族の「主観的健康感」「施設利用に対する抵抗感」「利用者との続柄」「施設と自宅間の距離」「介護経験」「利用者との関係」が明らかとなった。

面会時間の関連因子として利用者の「認知機能の低下」および利用者家族の「性別」「配偶者の有無」「利用者との続柄」「施設と自宅間の距離」が明らかとなった。

考察

特別養護老人ホームの利用者家族の多くが施設利用開始後も面会を行っていることが確認され、面会の理由として利用者とのコミュニケーションを重視していることが示された。面会頻度の関連因子として利用者の「認知機能の低下」、利用者家族の「主観的健康感」「施設利用に対する抵抗感」が、面会時間の関連因子として利用者の「認知機能の低下」、利用者家族の「性別」「配偶者の有無」「利用者との続柄」「施設と自宅間の所要時間」が新たに明らかとなった。利用者家族の健康状態の悪化に備え面会に行く際の援助者などのサポート体制の必要性が示唆された。施設と自宅間の距離が遠い家族は、面会頻度が低かったが長時間面会に行っていた。面会を貴重な家族交流の場として捉えていることが伺えたが、面会頻度が低い場合、普段の利用者の情報が少なくコミュニケーションが困難となることが考えられる。遠距離介護が増えつつある現在、施設による家族への適切な情報提供が求められると考えられた。さらに、利用者の認知機能が低下しているほど、面会頻度が低く面会時間が短いことから、認知機能が低下した利用者に対するコミュニケーションは困難であることが推測された。高齢化の進展により施設サービスへのニーズが高まりつつある現在、認知機能の低下をきたす施設内高齢者はますます増加していくことが予測される。認知機能が低下した施設内高齢者の家族に対する、高齢者とのコミュニケーション能力を高めるための援助の必要性が示唆された。

表 面会頻度および面会時間に関連する因子 n=299

	面会頻度			面会時間		
	B	SE B	β	B	SE B	β
利用者に関する項目						
利用者性別(女=1)	-	-	-	0.16	0.15	0.06
利用者年齢	0.02	0.01	0.13 *	-0.01	0.01	-0.08
施設利用期間	-0.14	0.05	-0.13 **	-	-	-
要介護度	0.22	0.04	0.24 **	-	-	-
認知機能の低下	-0.20	0.04	-0.23 **	-0.20	0.05	-0.22 **
利用者家族に関する項目						
性別(女=1)	0.15	0.10	0.07	0.34	0.13	0.16 **
配偶者の有無(有=1)	-	-	-	-0.59	0.15	-0.21 **
職業の有無(有=1)	-	-	-	-	-	-
主観的健康感	0.23	0.07	0.16 **	-	-	-
経済状態	-	-	-	-	-	-
ソーシャルサポート得点	-0.02	0.02	-0.05	-	-	-
施設利用に対する抵抗感	0.13	0.05	0.13 **	0.09	0.06	0.08
利用者と利用者家族の関係に関する項目						
続柄 ¹⁾						
配偶者	0.84	0.18	0.28 **	0.63	0.23	0.20 **
長子	-0.02	0.13	-0.01	0.10	0.16	0.05
子の配偶者	-0.35	0.17	-0.12 *	0.05	0.21	0.02
きょうだい	-0.26	0.23	-0.06	-0.51	0.28	-0.12
その他	-0.48	0.78	-0.16 **	-0.41	0.21	-0.13 *
所要時間	-0.23	0.04	-0.24 **	0.26	0.05	0.27 **
介護経験	0.12	0.05	0.12 *	0.09	0.06	0.09
利用者との関係	0.18	0.06	0.13 **	0.12	0.07	0.08
F	18.1**			7.58**		
R ²	0.508			0.272		
Adj R ²	0.478			0.236		

*P<.05 **P<.01

(注1) B=偏回帰係数; SE B=偏回帰係数の標準誤差; β=標準化偏回帰係数
(注2) †:Reference Category: 長子以外の子

(注3) 「-」は変数選択の結果モデルに投入されなかったことを示す。

ターミナル期の患者と家族にかかわる看護師の感情
Nurses' Emotion for Patients and Families in Terminal stage

16027 下平和代

Kazuyo Shimodaira

指導教官：杉下知子 教授

Tutor: Prof. C. Sugishita

健康科学・看護学専攻平成13年4月入学

Admission of School of Health Sciences and Nursing in April, 2001

緒言

ターミナル期では特に死に直面する不安など激しい感情反応が患者や家族におこるため、これに影響されて、看護師にも感情反応が生じる。この看護師の感情については従来あまり注目されてこなかったものの、看護師自身が感情に向き合うことの重要性が指摘されている。看護師の感情はターミナル期の看護の重要な要素であるとみなし、本研究ではターミナル期の患者と家族にかかわる看護師の感情に焦点をあてて、感情が行動に与える影響や、感情に影響を与える要因を探ることを試みる。本研究の具体的な目的は次の3点とする。(i)ターミナル期の患者と家族とのかかわりにおいて看護師が感情反応を生じるような場面に対する看護師の感情、行動、背景因子の間にはどのような関連があるのかを探索的に見出す。(ii)ターミナル期の看護を専門に行っている緩和ケアの看護師と、一般病棟の看護師では、ターミナル期の看護場面に対する感じ方にどのような違いがあるかを明らかにする。(iii)ターミナル期の看護場面に対して看護師が積極的にかかわりたいと感じることと、むしろ避けたいと感じることが、看護行動にどのように結びつくかを明らかにする。

方法

1. 対象

本研究の対象者は都内A特定機能病院とB一般病院の緩和ケア病床担当と一般病棟の看護師125名のうち、研究同意者108人(86.4%)であった。対象者の性別は1人をのぞいて女性であり、年齢の平均と標準偏差は 31.9 ± 10.0 歳であった。

2. 方法

2002年9月～10月に無記名自記式質問紙による調査を実施した。本研究は、ビニエツト法(vignette method)を用いて、ターミナル期の看護において看護師が感情反応を生じるような場面を設定し、各場面での看護師の感情と行動を尋ねた。ターミナル期の看護場面に対する感情と行動を尋ねた。場面は、文献のレビューと、実際にターミナル期の患者を看護している看護師数名への面接調査から設定し、ターミナル期の患者や家族とかわった経験のある看護師7名に予備調査実施して5場面を選択し再構成した。質問内容は 場面に対する感情13項目、行動13項目、患者と家族に対する志向性、背景因子、家族への志向に関連すると想定される経験6項目、家族看護の志向性、調和性である。

3. 分析方法

1)分析1

質問項目間の関連を探索的にみるために、全ての組み合わせについてクロス表をつくり、独

立性の検定 (Fisher の正確検定) を実施した。

2) 分析 2

背景因子である病棟、年齢、教育と場面の 4 項目を要因として、感情の 13 項目と患者と家族の志向性のロジスティック回帰分析を実施した。また、場面を除いた 3 項目を要因として、家族看護の志向性と調和性のロジスティック回帰分析を実施した。

3) 分析 3

感情 13 項目のうち各場面に対する印象である「積極的にかかわるだろう」(積極)と「避けたいだろう」(回避)の 2 項目を要因として、行動 13 項目のロジスティック回帰分析を実施した。

結果

1. 分析 1 の結果

質問項目間の関連を探索的に分析し、5 場面中 3 場面以上で関連が有意 ($p < 0.05$) であった項目の関連図を示した。特徴的な点は、(1) 全体の付置として感情領域と行動領域に分かれ、それぞれの領域内で樹状に展開していること、(2) 感情項目から行動項目へは、「積極」から「とりあえず看護」への強い負の関連が軸になっていることである。

2. 分析 2 の結果

一般病棟に比べ緩和ケアの看護師は場面への回避傾向や自己の無力感をもたず、家族の影響を受けて患者を看護し、家族看護志向と調和性が強かった。

3. 分析 3 の結果

積極的にかかわりたい者は、患者が気持ちを話せるように援助するが、仕事と割り切ったかわりやとりあえず看護することはせず、自分の感情を同僚に話すこともしない。「回避」したい者は、仕事と割り切り、患者アセスメントやケースカンファレンスを行うが、患者のそばにいることは選択しないという行動パターンが明らかとなった。

考察

「回避」と「自己否定」が結びついていることが分析 1 から読み取れる。今回の結果はターミナル期の看護場面において生じる、避けたいという感情が患者や家族の問題によるのではなく、自分自身の問題によるという仮説を支持している。

分析 2 より緩和ケアの看護師は一般病棟に比べて「回避」を感じず、「自己否定」を感じない傾向があった。緩和ケアでは患者や家族とのかかわりを重要な仕事と位置付けている。従って、治療中心の一般病棟の看護師に比べて、有効な治療がない場合であっても、「かかわる」ことに意味を見出している緩和ケアの看護師は自分を無力だとは感じないと考える。

分析 3 では「積極」と「回避」の行動パターンへの関連が明らかになった。これまで、ターミナル期に携わる看護師のストレスやコーピングを明らかにした研究はあるが、避けたいと感じても、仕事としてかかわっていかなければならない状況のもとで、どのような看護行動を選択するのかということ明らかにした研究はみあたらない。感情によって提供されるケアが異なるとすればそれは看護師としての倫理にかかわる問題に派生する可能性があるため、これまで語られてこなかったのであろう。その意味でも本研究の結果は重要であると考えられる。

ターミナル期のような倫理的な配慮を必要とする場面や、看護師の感情・行動などのセンシティブな内容を観察することは非常に難しい。ましてや、看護師の否定的な感情を対象とするには、回答者の個人的な見解が脅かされにくい方法であるビニエット法が適している。

The Determinants of Health Insurance Coverage Among a Korean Christian Church in Tokyo
都内のキリスト教教会に通う韓国人の医療保険加入に影響する要因

16028 Sookhee Pae

ペ スッキ

Tutor : Prof. C Sugishita

指導教官 : 杉下 知子 教授

Admission to School of Health Sciences and Nursing in April, 2001

健康科学・看護学専攻平成13年4月入学

Introduction

Lack of health insurance results in delayed care, difficulty in getting care, less care, and more adverse consequences from delayed or foregone care. Nearly 25% of the uninsured have no usual source of care, essential for preventive services and timely treatment for preventive services and timely treatment. More than one third of the uninsured report failure to receive needed medical care, and more than 70% postpone needed care. People without health insurance have a higher denial rate in seeking health care. That insurance coverage increases the use of health care is a common conclusion reached by many researchers.

Since Japanese health insurance system is compulsory for the entire population, there have been few researches done to explore the health insurance coverage. In addition, there has been an increase in the population of foreigners in Japan in similar to America. However, little has been known about foreigners in Japan in relation to health insurance coverage.

Therefore, the purpose of this study is to explore the characteristics of Korean at a Korean Christian church in Tokyo for determinants of health insurance coverage. Particularly, this study is to investigate the relationship between health insurance status and knowledge of health insurance system in the determinants of health insurance coverage and the reasons of being uninsured. This research will explore to identify unique risk factors, which in turn may suggest potential strategies to increase access to health insurance and health services for specific uninsured populations.

Methods

The variables were selected using Andersen's behavioral model to identify the determinants of health insurance coverage. Predisposing factors include demographics (e.g., age sex, and marital status) and social structure (e.g., education, nationality, and employment, family size). Knowledge about Japanese health insurance system was added to predisposing factor to explore any different effects for different ethnicity such as Korean in this study. The knowledge of Japanese health insurance system was asked with four basic information. Q1:"Do you know if foreigners who have the permission for staying longer than 1 year in Japan must have health insurance?", Q2:"Do you know if you do not have the health insurance, you must pay 100% of health care costs?", Q3:"Do you know if you have the health insurance, you pay 20-30% of health

care cost depending on the type of health insurance?”, and Q4:”Do you know that your premium for health insurance is decided by your income?”. Enabling factors are the resource available to those predisposed to use health services and include family resource (e.g., family income and health insurance). In this study, acculturation (e.g., Japanese proficiency, density of Japanese, and length of stay in Japan) was examined whether acculturation factors might have any effect on health insurance coverage for particular Korean sample. Need factors, immediate reasons for seeking health services, are perceived health status by General Health Questionnaire 28 items (GHQ-28) and need for health services (e.g., chronic disease).

The questionnaires were given to 538 Koreans, 289 of which were returned within one week, but only 195 of which were analyzed in this study due to missing data in the questionnaires and different nationalities who actually completed the questionnaires.

Within-group correlation coefficients were performed to identify whether determinants were significantly related to health insurance coverage using square test, Fisher’s exact test, or t-test. If the p-value for this test is less than 0.05, this should be concluded that these factors are significantly related.

Using SPSS 10.0 version, forward stepwise logistic regression were preformed. If p-value for this test is greater than 0.05, this result should be conclude that the model fits the data well. In this study, the p-value is 0.90, thus good fit.

Results

There was 159 samples being insured and 36 samples being uninsured. The mean age for the sample was 30.6 (SD=5.8) years old and uninsured people were slightly younger than insured people (Uninsured vs Insured: 26.1 ± 4.7 vs, 31.6 ± 5.6 $p < 0.001$). 67.3% of the insured people was married and 94.4% the uninsured was unmarried people.

Using forward stepwise logistic regression analysis, marital status and knowledge about the health insurance premium decision by their income were significantly related. The results showed that married people were being insured in greater numbers than unmarried people (OR: 22.07) and people who were less knowledgeable of how their premium were decided having less health insurance (OR: 0.07).

Discussion

This study showed that marital status and the knowledge of the premium decision according to their income were identified to determine the health insurance coverage for Korean Christian. This study may help to understand unique risk factors for the uninsured Korean Christian, which in turn may suggest potential strategies to increase access to health insurance and health services for specific uninsured populations in future research.

論文の内容の要旨

論文題目 授乳期乳腺炎の感染経路とその予防に関する研究

指導教官 杉下知子教授

東京大学大学院医学系研究科

平成 12 年 4 月進学

博士後期課程

健康科学・看護学専攻

氏名 河田みどり

1. 緒言

授乳期乳腺炎は、乳腺内における乳腺葉間の結合組織の小包炎であり、通常分娩後の 6 週間以内に発症する。乳腺炎は、細菌感染が原因で起こる感染性乳腺炎と、乳汁うっ滞が原因で起こるうっ滞性乳腺炎がある。感染性乳腺炎の起炎菌として、一般的なものは *Staphylococcus aureus* (*S. aureus*) や coagulase-negative staphylococci がある。*S. aureus* の感染経路として、乳児の鼻腔や医療従事者からの経路が考えられてきた。しかし、発症者の乳児から必ずしも *S. aureus* が検出されないことや、医療従事者からの伝播の証拠がないことから、感染経路はまだ明らかにされていない。

そこで、本研究は感染性乳腺炎において、いまだ解明されていない感染経路に着目した。そして、感染性乳腺炎を予防するには、感染経路を明らかにする必要があると考えた。そこで本研究は、1) 授乳期乳腺炎について発症状況を分析する 2) *S. aureus* を指標として、感染性乳腺炎の感染経路を明らかにすることを目的として行った。

2. 研究方法

本研究は、研究 1: 授乳期乳腺炎の発症状況に関する研究、研究 2: 妊産婦とその乳児における *S. aureus* の定着と伝播に関する研究、研究 3: 乳腺炎発症者から分離された *S. aureus* の感染経路に関する研究から成る。

3. 研究 1.

(1) 方法

1998 年 1 月から 2000 年 12 月の 3 年間に、A 病院で生産児を分娩した女性 1253 人について、授乳期における乳腺炎の発症について、既往コホート研究を行った。研究対象集団について、産科台帳・助産録から、基本的属性・入院および退院日・分娩日・分娩様式・

在胎日数・生下児体重・妊娠中の母体と新生児の methicillin-resistant *staphylococcus aureus* (MRSA) 保有の有無・出生後の新生児の感染の有無・新生児の新生児集中治療棟 (Neonatal Intensive Care Units[NICU]) および小児科病棟への転科の有無について調査した。また、研究対象集団が分娩退院後 A 病院の外来に授乳期乳腺炎を主訴として受診した場合、A 病院の外来診療記録から、受診日・受診した時の産後日数・経産婦の場合は前回分娩時の乳腺炎の既往の有無について調査した。乳腺炎の発症は、分娩後 1 年まで追跡し調査した。研究対象集団に関する前述の情報について、データベースを作成し、統計学的検討を行った。乳腺炎を発症した群を発症群とし、発症しなかった群を正常群とした。

(2)結果

3 年間の乳腺炎の発生率は、3.5%から 4.3%であった。乳腺炎の月別発生数の推移をみると、4 月から 9 月までの 6 ヶ月間に多く発生し、10 月から 3 月までは少ない傾向があった。発症群と正常群の 2 群間の分析では、1999 年は発症群のほうがより在胎日数が長く ($p=0.0024$)、新生児の体重がより重かった ($p=0.0017$)。3 ヶ年全体の分析では分娩様式において、発症群は正常群より帝王切開が有意に少なかった ($p=0.0023$)。

4.研究 2

(1)方法

3 つの条件、①5 月 17 日から 8 月 2 日にかけて、A 病院の妊婦外来を受診した妊娠 36 週以降の 20 歳以上の妊婦であること②分娩予定日が 8 月 21 日までで、母体・新生児ともに産褥 1 日目に直接授乳ができること③A 病院で産後 1 ヶ月健診を受診すると予測されることを満たした妊婦 39 名とその乳児について、妊娠中から産後 1 ヶ月までの間、継続して検体採取をした。また、A 病院の妊産褥婦とその乳児の医療に従事する医療従事者と環境からも、継続的に検体採取をした。採取検体から *S.aureus* を同定し、同定された *S.aureus* に対して 6 種類の薬剤感受性試験とパルスフィールドゲル電気泳動法により、分子疫学的解析をした。

(2)結果

母親が妊娠中に MRSA 保菌者でなかった症例の産後 31 日目の母子に MRSA が検出され、外来環境から検出した MRSA と遺伝的に同じ起源をもつ株であった。*methicillin-sensitive staphylococcus aureus* (MSSA) についても母子と医療従事者・環境の株では、遺伝的に同じ起源をもつ株の組み合わせが複数あった。

5.研究 3

(1)方法

A 病院で分娩し、5 月 17 日から 10 月 3 日にかけて、授乳期乳腺炎を主訴として A 病院の乳房外来を受診した女性から、検体採取した。受診時に乳児を伴う場合は、乳児も対象とした。また、A 病院の妊産褥婦とその乳児の医療に従事する医療従事者と環境からも、継続的に検体採取をした。採取検体から *S.aureus* を同定し、同定された *S.aureus* に対して 6 種類の薬剤感受性試験とパルスフィールドゲル電気泳動法により、分子疫学的解析をした。

(2) 結果

9 人の乳腺炎発症者から検体を採取し、6 人から *S.aureus* が検出された。6 人のうち、2 人は MRSA、4 人は MSSA であった。発症者から分離された MRSA と外来環境から分離された MRSA は、同じ遺伝子をもつ菌株であった。2 人の発症者からの MSSA と外来環境から分離された MSSA 株も、同じ遺伝子をもつ菌株であった。

6.結論

A 病院の病棟移転前 3 年間における授乳期乳腺炎の発症は、4 月から 9 月までに多く発症し、10 月から 3 月までは少ない傾向にあった。また、年間を通じての乳腺炎の発生率は、3.5%から 4.3%であり先行研究と同様な発生率であった。乳腺炎発症群と正常群の 2 群間では、1999 年は発症群は正常群より在胎日数が長く ($p=0.0024$)、新生児の体重がより重かった ($p=0.0017$)。3 ヶ年では分娩様式において、発症群は正常群より帝王切開が有意に少なかった ($p=0.0023$)。

PFGE の結果、母親が妊娠中に MRSA 保菌者でなかった母子の MRSA 株と、外来環境の MRSA 株は、遺伝的に同じ起源をもつ菌株であった。これより、病院内に伝播している MRSA 株が母子に伝播した可能性が推測された。また、MSSA 株の母子への伝播は、医療従事者・環境・医療従事者以外の家族や面会人が関与している可能性が推測された。

PFGE の結果、乳腺炎患者の MRSA 株と外来環境の MRSA 株が、同じ遺伝子をもつ菌株であった。また、乳腺炎患者 2 人の MSSA 株と外来環境の MSSA 株は、同じ遺伝子をもつ菌株であった。これより、感染性乳腺炎の感染経路は、医療従事者・病院環境が関与している可能性が推測された。

論文の内容の要旨

論文題目 CLINICAL STUDY FOR ESTABLISHMENT OF SAFETY INFORMATION
 ON ACUPUNCTURE
 - PROSPECTIVE SURVEYS ON ADVERSE EVENTS -

鍼治療の安全性情報確立のための臨床研究
- 有害事象の前向き調査 -

氏 名 山下 仁

背景および研究目的

先進国における鍼，マッサージ，生薬などの相補代替医療（CAM）の利用率は，近年かなりの増加傾向が見られる。鍼治療は CAM の中でも世界で最もよく知られている治療法のひとつである。一生のうちに鍼を受けた経験がある人の割合は，低い国でもイギリスとアメリカ合衆国で3%，高い国ではフランスで21%にも及ぶ。鍼治療を行う医師の割合は，スコットランドとアメリカ合衆国における1%から，最も盛んなスウェーデンにおける25%まで様々である。日本においてはパーセンテージは報告されていないが，国家資格をもった鍼師の数は13万7千人にも及ぶ。

欧米先進国における CAM の普及にともない，鍼の科学的研究も多く行われるようになってきた。1997年にはアメリカ合衆国の国立衛生研究所（NIH）が召集したコンセンサスパネルが鍼の科学的根拠について合意声明を発表した。また2000年にはイギリスの英国医師会（BMA）が鍼に関する調査レポートを発表した。NIH パネルも BMA も evidence-based medicine（EBM）の観点から鍼を評価しており，発表された声明やレポートも嘔気や歯痛などに対するプラシーボ効果を超えた鍼治療の効果について言及している。このように鍼の有効性については EBM に則ってランダム化比較試験などの前向き（prospective）研究による情報が徐々に整備されつつある。

一方、安全性についての研究は、症例報告などの後ろ向き (retrospective) 研究がほとんどで、EBM の観点からは質が低く、今までのところ信頼できる情報がないのが現状である。ある疾患や症状をもつ患者に鍼治療を適用するかどうかを決定するためには、有効性と安全性とのバランスを検討する必要がある。また鍼治療が危険な治療法であるならば規制が必要である。このような理由から、鍼治療の安全性に関してもエビデンスの強い手法で研究が行われなければならない。

日本で発表されている鍼治療による有害事象に関する症例のシステマティックレビューを行うと、最近の 13 年間で 89 論文 124 症例が報告されていることがわかった。その内訳は、気胸が 25 例と最も多く、次いで脊髄損傷が 18 例、急性 B 型肝炎が 11 例といった症例であった。これらの重篤な有害事象のほとんどは鍼師の過誤や患者の自己治療によるものであり、薬剤と同じ文脈での副作用 (有害反応) についての頻度や重症度については有用な情報が得られなかった。また発生率を計算する際の分母となる鍼治療総数が不明なため、どの程度の頻度で有害事象が起こっているのかが把握できない。さらに、後ろ向き研究には相当な記憶バイアスや報告バイアスが存在するため、安全性情報はますます不確かなものとなる。これらの問題はエビデンスの弱い症例報告にもとづいた研究しか行われていないことから生じているものである。

そこで本研究では、鍼の安全性に関して EBM の観点から信頼性の高い情報を得るために、鍼の臨床における詳細な問診と観察にもとづく有害事象の前向き調査を行った。なお用語は臨床薬理分野における定義にしたがい、因果関係を問わず認められた好ましくない医療上の出来事を「有害事象 (adverse event)」と呼び、有害事象のうちで治療者の「過失 (negligence)」と「無知 (ignorance)」を除外した患者の反応を「有害反応 (adverse reaction または副作用)」とした。

方法

外来患者の約 60% に鍼治療を行っている筑波技術短期大学附属診療所において 2 回の前向き調査を実施した。1 回目は 1992 年から 1998 年にかけて行った 6 年間にわたる有害事象 (過失と無知を含む) 調査である。すべての鍼灸師に対し、鍼治療の有害事象に気付いた直後に症例報告書式に情報を記入して提出するよう要請した。

2 回目は 1998 年 4 月から 7 月にかけて行った 4 ヶ月間にわたる有害反応 (過失と無知を含まない) 調査である。1 回目の 6 年間の調査では、注意すべき有害事象であると鍼灸師が判断した場合のみ報告を依頼したのに対し、2 回目の 4 ヶ月調査では知り得たすべての有害反応情報を報告するよう依頼した。7 名の鍼灸師が刺鍼したすべての部位を観察し、また治療後と次の来診時には、因果関係に関わらず患者が感じた好ましくない身体反応について問診した。認められた全身反応、およびすべての刺鍼が起こした局所反応の情報は、構造化した報告書式に記入して提出された。構造化報告書式の内容は、日付、鍼灸師名、患者名、性別、年齢、ID 番号、刺した鍼の数、鍼刺激の方法、有害事象の種類、起こった

部位、症状の規模、および処置内容である。

提出された報告書式は事象ごとに分類し、全身性の有害反応と局所性の有害反応に区別した。全身性有害反応の発生率は、報告された患者数を総患者数で割ることによって算出し、パーセント表示した。局所性有害反応の発生率は、反応を起こした刺鍼数を総刺鍼数で割ることによって算出し、パーセント表示した。また、個々の患者内での局所性有害反応の発生率も算出して比較検討した。

結果

1 回目に行った 6 年間の有害事象調査では、結果的に 84 名の鍼灸師が外来臨床活動に参加した。鍼治療総数は 65,482 回、実際の患者数は 5,008 名であった。有害事象は 94 件報告され、14 のカテゴリーに分類された。多い順に、鍼の抜き忘れが 27 件、疼痛を伴わない皮下出血または血腫が 9 件、疼痛を伴う皮下出血または血腫が 8 件、熱傷が 7 件、気分不良が 7 件、めまいが 6 件、嘔気または嘔吐が 6 件、刺鍼部疼痛が 6 件、微量の出血が 4 件、主訴の悪化が 4 件、疲労感が 3 件、掻痒感・発赤が 3 件、発熱が 3 件、上肢のしびれ感が 1 件であった。これらは前述したように、鍼灸師が報告するに値すると判断した有害事象のみである。熱傷のうち 1 件は赤外線照射によるもので治癒に 2 年を要し、保険会社による賠償が適用された。それ以外の有害事象については軽症で一過性であり、後遺症を認めなかった。

2 回目に行った 4 ヶ月間の有害反応調査では、鍼治療総数が 1,441 回、実患者数が 391 名であった。刺した鍼の総数は 30,338 本であった。報告された全身性の有害反応は、多い順に、疲労感（受療患者の 8.2%）、眠気（2.8%）、愁訴の悪化（2.8%）、掻痒感（1.0%）、めまい・ふらつき（0.8%）、気分不良・嘔気（0.8%）、頭痛（0.5%）、胸痛（0.3%）であった。局所性の有害反応は、微量の出血（刺した鍼の 2.6%）、刺鍼時痛（0.7%）、点状出血または斑状出血（0.3%）、治療後の刺鍼部位の疼痛（0.1%）、皮下血腫（0.1%）、置鍼中の疼痛または不快感（0.03%）であった。いずれの有害反応も軽症で一過性であり、後遺症を認めなかった。

4 ヶ月調査のデータについて個々の患者における発生率を分析すると、1 名の患者において刺鍼数の 33.3%という高頻度で微量の出血が見られ、別の 1 名の患者において刺鍼数の 50.0%の高頻度で刺鍼時痛が見られ、同じく別の 1 名の患者において 33.3%の高頻度で皮下出血が認められた。10 代の患者は刺鍼時痛を訴える頻度が高い傾向が見られ、60 歳以上の患者では皮下出血が観察される頻度が低い傾向が認められた。また、女性の患者の方が男性よりも頻繁に刺鍼時痛を訴える傾向がみられた（ $P=0.088$ ）。部位別では、頭部と前腕外側の微量出血、手背と腰部の刺鍼時痛、および上腕前面と腹部の皮下出血の頻度が、平均の発生率よりも 2 倍以上の高頻度で認められていた。

考察及び結論

本研究で記録された有害事象および有害反応は短期間で起こったものであり、組織学的あるいは内分泌学的な変化については検出できない。しかしながら、鍼治療の有害反応の発生率を算出できた前向き調査は本研究が最初である。薬剤の副作用に関する前向き調査のシステマティックレビューによると、重篤な副作用の頻度は6.7%である。したがって鍼治療の副作用は、薬剤の副作用と比べると相対的に軽症であり、重篤な副作用が起こることは非常に稀であることがわかった。

比較的頻繁に発生する鍼治療後の疲労感、眠気および主訴の悪化については、今まで東洋医学の分野では「暝眩」と称して治癒を示唆する反応であるとされてきた。しかし車の運転など、患者が治療後にさらされる危険を考慮すると、薬剤の場合と同様に副作用として周知すべきである。また、少数ではあるが、疾患、服薬、あるいは特異体質などによるものと思われる高頻度の出血や刺鍼時痛を発現する患者がみられた。鍼の臨床においてはこのことに留意して、治療者が血液と接触したり患者が急激な動きをしたりすることを避ける必要がある。

本研究によって、患者が鍼を受けるかどうかを選択する際の判断材料となる「リスクと利益のバランス」の観点にもとづく安全性情報が得られた。鍼治療自体が内包しているリスクは低いことがわかった。しかし本研究は国立診療所で研修を受けた鍼灸師による標準的な鍼治療についての調査である。一部の鍼師や医師の過失や無知によって起こる気胸、脊髄損傷、心タンポナーデ、感染といった症例が多く報告されている。このことから、鍼を扱う者に卒後研修の機会を与えること、および有害事象報告を収集・分析して改善策を検討し最新情報をフィードバックするようなシステムが適切な団体によって設立されることが将来の課題である。

教室員 (2001年4月～2003年3月)

教授	杉下知子
助教授	上別府圭子 (2002年4月～)
非常勤講師	高橋真里 田中哲郎 鳥居央子 須貝佑一 渡辺裕子 法橋尚宏
助手	小林奈美 松井典子 (2001年7月～；～2001年6月博士)
技術官	秋山照男
事務補佐員	滝沢枝里 (～2001年6月) 植木智子 (2001年7月～2003年3月) 君塚昭子 (2002年4月～2003年3月)
大学院生	博士 河田みどり 池田智子 杉山智子 (2002年4月～；～2002年3月修士) 細坂(福田)泰子 (2002年4月～；～2002年3月修士) 修士 深堀浩樹 北野和代 ペスッキ 涌水理恵 (2002年4月～休学) 古田正代 (2002年4月～) 松本和史 (2002年4月～)
客員研究員	手塚圭子 大谷尚子 西岡光世 内藤直子 大嶺ふじ子 河原宣子 山下 仁 林邦彦 森那美子 日下修一
研究生	劔物(工藤) 祐子 (2002年4月～) 大脇万起子 (～2002年9月) 百合野秀朗 (～2001年9月) 矢野ひろみ (～2002年3月) 浅香知子(2001年10月～) 熊井秋穂 (2001年10月～2002年9月) 斎加志津子 (2002年4月～)

家族看護学教室年報 第5号

発行年月 平成15年3月31日

発行責任者 東京大学大学院医学系研究科家族看護学分野

東京大学医学部家族看護学教室

Tel:03-5841-3694 / Fax: 03-5802-2960

